

NPO法人

731資料センター

会報 第22号

[2017年6月27日発行]

「飽食した悪魔」の戦後(前半)

—731部隊の隠蔽・免責・復権と二木秀雄

加藤哲郎 2

731部隊員の証言／第8回学習会(2016年12月16日)

第一部レントゲン班所属田中信一さんと第二部昆虫班所属小笠原明さんの証言

近藤昭二 10

【山邊さんのコラム】私と松花江(第4回) 戦友の後を訪ねる

山邊悠喜子 24

731部隊問題関連裁判の裁判日程 傍聴をお願いします！

- ①情報公開裁判(化学学校記事)【民事3部】第4回／7月12日(水)11:30／東京地裁522号法廷
- ②ビザ発給拒否・集会妨害国賠訴訟【民事1部】9月22日(木)10:30／東京地裁415号法廷
- ③情報公開裁判(衛生学校記事)【民事51部】第15回／9月26日(火)14:00／東京地裁419号法廷
- ④安倍靖国参拝違憲訴訟＝第1回期日は未定【現在東京高裁に提出する控訴理由書作成中】

新刊のお知らせ

加藤哲郎著

「飽食した悪魔」の戦後 七三一部隊と二木秀雄『政界ジープ』

花伝社 (2017年5月25日発行)

731部隊で結核・梅毒の人体実験を企画・実行した二木秀雄。戦後GHQによって免責された彼は、故郷の金沢で時局雑誌刊行を始め、政財界にも人脈を広げる。個人の一生をたどりながら、戦後に連続した731部隊の隊員たちの活動と、医療民主化の裏側での医学者たちの復権をアメリカ公文書などの新資料から明らかにする。

(当センターでも取り扱っています)



NPO法人 731部隊・細菌戦資料センター

共同代表 近藤昭二、王選、松井英介

〒105-0003 東京都港区西新橋1丁目21番5号 一瀬法律事務所
電話 03-3501-5558 FAX 03-3501-5565 Website <http://www.anti731saikinsen.net/>

「飽食した悪魔」の戦後(前半)

—731部隊の隠蔽・免責・復権と二木秀雄

2017年4月9日(中野区産業振興センター) 第6回総会・記念講演より

加藤哲郎 (一橋大学名誉教授)



(近藤昭二さんの解説)

加藤先生はコマンテルンの政治学的研究から始まって、「永続民主主義革命論」や「象徴天皇制」をめぐる論考など非常に広範囲で、多岐にわたる研究活動をしています。

731部隊について、特に二木秀雄の活動について、非常に綿密な調査をされて、間もなく5月末に、『「飽食した悪魔」の戦後』という本が刊行される予定です。400ページに及ぶ膨大な731に関する著作なそうです。

731部隊については、今まで300冊に及ぶ関連図書が出ておりますが、なかなか高級将校や高等官の伝記とか研究、列伝が全く無いと言つていいぐらいです。石井四郎についてのものがあるくらいで、二木クラスの高等官、部隊の上層部と、下の兵士たち、研究班員たちとのつなぎ役にいるような位置の二木秀雄が取り上げられた。しかも、戦後においてGHQとの秘密交渉で免責にたどり着く。それからミドリ十字を設立して朝鮮戦争に関わっていく。『政界ジープ』という雑誌を舞台に復権していく過程というのは、数奇な半生とも言えます。これを詳しくこの御本で書かれておりますが、今日は、そのダイジェスト、核心の部分をお話しいただきます。

(加藤哲郎さんの講演)

1. 多羅里園の731部隊「精魂塔」とソルゲ事件を手がかりに

ご紹介いただきました加藤と申します。案内には一橋大学名誉教授になっておりますけれども、実は10日前まで早稲田大学大学院の客員教授で、3月末で2度目の退職になりました。ようやくいろいろなことが自由にできるようになりましたので、今日も実は総会の方を見せて頂き、NPOの会員になりたいとお願いしました。今後はこういう活動もやっていきますので、よろしくお願いいたします。

731部隊の問題を、今、本にしています。『「飽食した悪魔」の戦後——731部隊二木秀雄と「政界ジープ』』というタイトルで、花伝社から5月下旬に出来ます。皆さんの所には、多分縦書きと横書きのレジメがそれぞれ5ページついていて、その縦書きの方に「はしがき」が入れてあります。

す。横書きの方の後ろの方に、小見出しまで入った目次が入っています。本の方は4000円近い値段で、なかなか個人の方に買ってもらうのは大変かもしれませんけれども、今日はチラシだけ入れさせていただきました。

今日お話しするのは、その中の、731部隊の隠匿・免責・復権という問題です。はじめは細菌戦部隊の存在そのものを隠そうとした。隠そうとしたらもう米軍が知っていた。それで今度は戦犯にならないようにと免責工作を進め、GHQのG2(参謀2部、情報・諜報担当)に保護され、米軍細菌戦部隊に人体実験データを提供してパーティーしようとした。東京裁判が結審し、石井四郎以下幹部たちが戦犯にならないで済んだころ、人体実験や細菌戦に加わった医師・医学者たちも復権していく。この復権には、GHQの中のPHW(Public Health and Welfare: 公衆衛生福利局)という部署が関係しています。日本の医学界が全体として民主化される過程に便乗して、731部隊の医師たちが生き残っていった話です。

それらに深くかかわったのが、二木秀雄(ふたぎ・ひでお)という医師で、柔道有段者の武骨な男です。これがなぜか初めは金沢で『輿論』というローカル雑誌、その後上京して『政界ジープ』という大衆時局雑誌を10年間出す出版社社長になる。その途中で『医学のとびら』という厚生省医務局の医学生向け雑誌を出して、医学界・医薬産業にも入り込んでいく。こういう流れを追いかけていくと、それがどうも731部隊の再結集と関わるそだ、と見えてきました。

もうひとつ、二木秀雄が重要なのは、『政界ジープ』で儲けた金なのか、731部隊の隠匿資金なのか、あるいはGHQにデータを提供してもらった金なのか特定できないのですが、巨額のお金を持っている。それを資金にして、終戦から10年経った1955年に、こっそりと隊友会「精魂会」という731部隊の同窓会を作った。この精魂会が秘密結社のように作られ、なぜか多羅里園の中に「精魂塔」という慰靈碑を建てます。表にも裏にも何も書いていない慰靈碑ですけれども、これは151万円かかります。そのうち146万円をこの二木秀雄がボント私費を払って、731部隊の慰靈塔を作った。それが実は、『政界ジープ』の記事を手がかりにソルゲの遺骨が

発見され建てられた、リヒアルト・ゾルゲの墓、尾崎家の墓、ゾルゲ事件被告たちの慰靈塔の近くに建っているのです。



多磨靈園 731 部隊精魂塔(左)、多磨靈園 ゾルゲの墓(右)

2. ゾルゲ事件を「赤色スパイ事件」と名付けた二木秀雄『政界ジープ』

なぜこれが 731 部隊の慰靈塔だとわかったかと言いますと、私は今度の本を書く前に『ゾルゲ事件』という平凡社新書を 2014 年に出しています。そのゾルゲ事件の関係で、『政界ジープ』という時局雑誌が重要になったのです。現物はこういうペラペラの紙で、表紙が裸の女性で、当時カストリ雑誌とかエログロナンセンスと言われたもののひとつです。

『政界ジープ』1948 年 10 月特別号の真ん中に「尾崎ゾルゲ赤色スパイ事件の真相」と書いてあります。この記事が実は、ゾルゲ事件にとって非常に重要な、画期的な記事でした。尾崎、ゾルゲが「赤色スパイ」と呼ばれたのは、この記事が初めてでした。戦後すぐの時期は、ゾルゲ事件はスパイ事件というよりは、反戦反ファシズム闘争の一部とされていました。尾崎秀美（ほづみ）という元朝日新聞記者が獄中で書いた家族への手紙『愛情はふる星の如く』がベストセラーになり、「彼らは日本軍国主義に反対した闘士で愛國者だ」とされていた。



1948 年 10 月特集号『政界ジープ』

この雑誌が 48 年 10 月に出るんですけども、その数ヵ月後の 49 年 2 月に出た GHQ の『ウイロビー報告』で「赤色スパイ事件」というタイトルが付けられて、それ以来ゾルゲはソ連のスパイ、尾崎もスパイだった、朝日新聞は共産主義スパイを出したという話に変わって行く。ソ連側は、64 年までゾルゲなんか知らないという態度を取って反論もしないものですから、「尾崎

ゾルゲ赤色スパイ事件」というイメージが 1 人歩きして定着していく。その最初の報道をしたのが、この『政界ジープ』です。この記事を見て、ゾルゲの「東京妻」だった愛人石井花子は、ゾルゲの遺骨を発見し、多磨靈園にお墓を建てました。

無署名の記事ですから、どうやってこの記事が出来たのかと思って調べたら、731 部隊結核班長の二木秀雄が発行人で、ジープ社社長でした。そのお墓が多磨靈園の中にありました。これが二木秀雄のお墓です。そこから 100m ぐらいの所に、731 部隊の精魂塔がありました。



二木秀雄墓碑

これらのお墓は、インターネットに『歴史が眠る多磨靈園』という大きなホームページがあり、多磨靈園に眠る著名人の墓碑の解説記事が出ています。この精魂塔について、ホームページを作っている小村大樹さんという方が、多磨靈園の事務所の帳簿を調べて「Unit 731 Memorial」つまり 731 部隊の慰靈塔だと特定しました。森村誠一『悪魔の飽食』にも出てきます。こののっぺらぼうの何もない慰靈碑に、毎年 8 月 15 日に一番近い日曜日に 731 部隊の関係者が集まって、かつて満州でやってきたこと、現在どうなっているかを語り合う戦友会・同窓会を開いていたのです。

でも、何で多磨靈園なのか。精魂塔が出来たのは 1955 年ですが、普通の戦友会、一般的日本の戦友会は、もう少し前、1949 年に靖国神社の存続が決まり、52 年にサンフランシスコ条約で日本が独立すると、53 年頃から続々と出来て最高時 4000 も隊友会（戦友会）が作られます。こうした戦友会・隊友会のほとんどは、靖国神社にお参りする。戦友が祀られた靖国神社の近くの料亭かなんかで、「同期の桜」とか「さらばラバウル」など軍歌を唄って昔を懐かしむ。これが普通の戦友会の形です。

ところが、731 部隊は、ずっと存在そのものが隠されている。表に出ることが出来ない部隊です。それで、二木秀雄が画策して同窓会をこっそりと作り、731 部隊だけの小さな靖国神社に当たるものを作った。私は「ミニ靖国」と呼んでいるんですが、関係者を慰靈し集まることのできる精魂塔を多磨靈園の中に作った。ちょうどそのすぐ近くにゾルゲの墓、尾崎家の墓もあったので、『政界ジープ』の二木秀雄を研究してみようと思ったわけです。調べていくと、二木秀雄が大変ユニークな人物で、731 部隊研究にとっても重要だとわかったのです。

3. 731部隊平房本部の1300人は早々に帰国

731部隊はどういうものだったのか。石井四郎が隊長というのはわかっている。その他に731部隊には何人いて、戦後どうなったのか。1981年に森村誠一が『悪魔の飽食』を書いてベストセラーになったので、私は『「飽食した悪魔」の戦後』として、戦後の事を調べてみた。『悪魔の飽食』が出た頃から、731部隊の関係者も重い口を開き始め、幾つか回想が出ている。近藤さんたちの聞き取りも進む。それでもまだ全容がわからないのです。

最初の頃の記録では、例えば1945年の8月11日に参謀本部の朝枝中佐がやってきて、「全ての731部隊の記録を地球上から永遠に抹殺せよ」と言った時に、その命令書の中に「細菌学等の博士号を持つ53人の医者は、直ちに日本に帰すように」と言っている。その人たちは、細菌戦についての非常に重要な知識を持っているから、ソ連軍がやってくる前に帰れと言っています。それらにもとづいて平房本部の隊員たちは、素早く帰国した。

それからジャーナリストの青木富貴子さんが見つけた石井四郎の個人的な「終戦當時メモ」がありまして、その中の45年11月20日付に満州から帰って来た1300名、満州の平房本部にいた人たちのことがでてくる。牡丹江とかいろいろな所に支部があったのですが、彼が直接の指令で帰することが出来たのは平房の1300名です。その1300名を一時的に300人、できればさらに小さく100人、彼の使える医者の優秀な者だけを残して、あとの連中には退職金、というよりも口止め料を払って、「絶対に731部隊の事は言なよ」と言って部隊を解散しようと思ったらしいメモがある。その中に、兵士700人、女性400人、少年200人と出てくる。女性が400人もいた。731部隊の女性の問題は重要で、郡司陽子という女子隊員の手記があるぐらいで、あの記録に隊員の奥さんが一緒に行っていた話はありますが、あまり出てこない。どうも女性も400人ぐらいいた。少年兵の方は、少年兵同窓会「房友会」の記録があり、ある程度わかっています。とにかく石井四郎は、平房の1300人に口止め料を配って何とか秘密を保とうとした筋がある。一時的ですがスリム化の構想もありました。

4. 满州に取り残されソ連に抑留された1200人

満州の他の支部にいた残りの1000—1200人を、石井四郎は当初、ソ連に捕まるとあきらめていたようです。その1200人ぐらいの、平房本部にいなかつた他の支部の隊員の多くは、ソ連軍に捕まって、シベリア抑留の一部になる。しかも、731部隊で人体実験や細菌戦をやったことがわかれれば戦犯にされる。1949年の末にハバロフスク裁判があり、その裁判記録があります。これには12人の731部隊の関係者が被告になります。山田乙三閩東軍司令官も入っていますが、

実際に人体実験や細菌戦を指導ないし実施した人たちが捕まって有罪となった。731部隊の川島清ら一番重い被告は禁錮(矯正労働)刑25年、実は当時のソ連では最高刑です。普通のシベリア抑留の人は、ほぼ1950年までには帰ってくるのに、731部隊の戦犯とされた人々は、その後も収容所に残される。

ハバロフスク裁判の関係者は12人の被告だけじゃなくて、証人として20人ぐらいの名前が出てくる。それを合わせても、せいぜい30人ぐらいです。千数百人がシベリアで捕まっていると石井四郎も想定しているのに、実際に裁判にかけられたのは12人しかいない。近藤さんは、旧ソ連のハバロフスク裁判で使われた、シベリア抑留者の中の731関係者の記録を見ているんですが、実際731関係で尋問を受けた人が、ちょうど100人ぐらいなそうです。シベリア抑留は日本人60万人ですから、その中の100人は、小さい数です。731部隊関係者で100人ぐらいは、どうも「細菌戦、人体実験という国際法ジュネーブ議定書に違反する戦闘に加わっていただろう」と、ソ連で実際に尋問を受けた。12人が被告として裁判にかけられ服役して、1956年の日ソ国交回復の恩赦で戻ってくるのですけれども、それでも1200人のうちのせいぜい100人くらいです。

あとの人たちはどうなったのだろうと思って、私はこの研究とは別にシベリア抑留の研究をアメリカの国立公文書館でやっているのですから、その関係資料を見ていたら、自分は731部隊の関係者だけれども、そのことをひたすら隠してようやく日本に帰ったという人が、何人かいるのです。実際に見つけたのは3人分ぐらいですけれども、731部隊関係者で、自分は細菌戦に関わったと言えばソ連で大変な罪に問われるから、そのことを隠して、普通の兵士だったと言つて帰ってきた人が、シベリア抑留帰還者の中に数百人いるだろうと思われるのです。ある731部隊と関係ないシベリア抑留者の手記では、抑留所のエピソードとして「自分の部隊には四国出身で731部隊でネズミ捕りをやっている男がいた。この男は面白おかしく731部隊の様子を退屈な強制労働の合間に話してくれた」といった話が出てくるのです。ですから、石井四郎のいう帰国した平房本部の1300人、満州に残された1200人ぐらい、合わせて2500人から2600人、それが森村誠一『悪魔の飽食』がベストセラーになった頃までの、およその推計でした。

5. 単人慰留支給対象調べでわかった3600人の大部隊

ところが、『悪魔の飽食』や少年兵の手記などが出で、それを野党が国会で追及し始めたわけです。1982年、『「悪魔の飽食」にはこんなことが書いてあるがこれが事実か』ということで、

共産党の柳利夫という議員が追及したときに、厚生省の側が、実はと言つて出してきたのが、3559名という数字です。その後一人増えて3560名になっている。そうすると、石井の話の満州に残された部隊の他にもどうも数百名がいて、総計は3600名近く、3560名と今はなっています。正確に言うと、2012年に社民党的国会議員が厚生労働省に質問書を出した時の答えが、731部隊の総計3560名です。そこには、将校（少尉以上）131名、准士官（准尉）18名、下士官（曹長・軍曹・伍長）163名、兵士（上等兵・一等兵・二等兵）1027名のほかに、「軍属」として技師50名、技手197名、雇員1270名、傭人633名と数が出てくる。

ところがこれは、戦争を知らない世代には分かりにくい。技師とか技手って何なのでしょうか。石井四郎ほか、大幹部たちは軍医つまり軍人だった。ところが、これからお話しする二木秀雄とか、京大から行った石川太刀雄、岡本紳造とか笠原四郎とか、そういう大学から送られて731部隊で人体実験をやっていた医者の多くは、実は技師という名前です。技師というのはエンジニアと思われるかもしれません、軍隊の軍事用語では軍属・文官です。軍人ではないけれども、軍隊で軍人と一緒にいろいろな事をやっている人々がいる。この人たちの中に、高等官の技師50名、判任官の技手が197名、それに雇員、傭人がいた。このうち軍属の雇員・要員は軍人恩給の受給対象にならないが、軍属でも技師・技手には軍人と同じく軍人恩給の支給対象者と認める、というのがこの数を厚生労働省が出した意味です。雇員1270名、傭人633名は、京大の石井四郎の恩師済野謙次や二木秀雄の金沢医大時代の恩師谷友次のような「団託」という名の非常勤顧問と共に、軍人恩給受給の対象者にならない。しかし残りの1657人は軍人恩給受給資格がある、ということです。これは、日本政府が731部隊を日本軍の一部として公式に認めたということです。

1943年の陸海軍人給与法をレジメに入れておきましたけれど、大将550円から始まりまして、上等兵、一等兵などは給料が10円とか9円です。二等兵は1銭5厘の袴巻で徴兵されて月給6円の時代に、中佐、大佐、少将、中将など将校は300円とか500円もらっている。

軍人社会は徹底的なピラミッド社会で、階級が上に行けば給料も待遇もいいし権限も大きい組織です。この中の将校が、731部隊の場合には131人いた。下士官というのは曹長、軍曹、伍長ですけれども、それが163人いた。兵というのは一般兵士、二等兵、一等兵、上等兵の給料10円以下、これが1217名いたのです。膨大な組織の中のほんの一握りは300円の月給をもらっていて、一番下で仕事をして戦闘犠牲者も多い兵士は、たった10円の月給で仕送りも出来ないような生活をしていたことが見えてくる。

もっとも「外地」では特別の手当がで、731部隊は、その恩恵も受けているはずです。

陸軍軍人給与(昭和16年)					
階級	月給	年給	俸、軍	月給	年給
大將	550	6600	大將	550	6600
中將	533	6399	中將	533	6399
少將	410	5000	少將	410	5000
大佐	310	3720	大佐	310	3720
中佐	210	2520	中佐	210	2520
少佐	200	2400	少佐	200	2400
大尉	135	1620	大尉	135	1620
中尉	94	1120	中尉	94	1120
少尉	70	840	少尉	70	840
准尉	110	1320	准尉	110	1320
軍長	75	900	上等兵曹	35	420
軍曹	20	240	一等兵曹	25	300
伍長	10	120	二等兵曹	22	264
上等兵	13	156	A兵	16	192
一等兵	9	108	一等兵	11	132
二等兵	6	72	二等兵	8	96

↑ 技師 ↓ 下級士官と並ぶ個人

単位：円、年賃：一等級、俸給：切替

正月の賃料
12ヶ月 = 120
年賃 = 360
米 (1kg) = 360円
支度料 (1ヶ月) = 60円

出典：文部省立小学校教科書「世界の軍事」第3編、1934年

俸給表

もうひとつ、この俸給表に書き加えましたが、軍属の中の技師というのは将校級です。正確に言うと技師の6等、5等、4等とあるのですが、技師の6等が二木秀雄の初めの身分で少尉級です。彼は最後は2等技師で中佐級です。月給・待遇は、ほとんど軍人である軍医と同じです。軍属の技師、つまり医者たちの中で、実際に人体実験や細菌戦をした実行部隊は、青年将校格です。石井四郎たちは命令を下す側ですが、実際にペストノミ爆弾を作ったり、安達の実験場で生体実験をしたのは、大体が1910年前後の生まれ、当時30歳代後半から40代の技師たちです。兵士の下士官に相当するのが技手です。難しい言葉で言えば、技師というのは高等官で天皇の任命になるのですが、技手というのは判任官で曹長、軍曹、伍長クラスです。このように、731部隊には2つの系列があって、軍人の系列と軍属の系列があります。雇員が1270人、傭人が633人、要するに2000人ぐらいの雇い人がいるので、軍人の系列よりも軍属の系列の方が、数としては多いのです。

6. 戦友会「精魂会」「房友会」名簿に残されたのは1割300人超

この厚生労働省の記録は、731部隊に誰が所属していたのかの記録です。軍人恩給をもらうときには自己申告で軍属証明書をもらわなければいけないのですが、それを都道府県授認局で発行するための台帳です。軍人の兵士は恩給が

出るが、傭兵・傭人には出ない。もともと兵士たちは軍壁を隠すようにいわれていましたから、申請しなかった人が多数いた可能性がある。シベリア抑留婦りの人たちは、ハバロフスク裁判の被告・証人にされた人はともかく、他の人々は 731 部隊への所属を隠して帰国し、その後もずっと隠し続けた人が多いはずです。厚生省名簿の中に入っている可能性はあるが、申請しなかったかもしれない。

重要なのは、朝鮮人、中国人も 731 部隊に入っていた可能性はあるが、厚生省記録には出てこない。中国側の研究・証言では、中国人「労上」という名前で出てきます。身分団で言いますと、軍属の下の方の雇員、傭人よりもさらに下に「労工」がいて、これが大体中国人です。何をやらされたのかというと、ノミやネズミの世話とか、いわば汚れ仕事を日本人にこき使われながらやっていた。この人々は、日本軍に使われたのに、厚生労働省の名簿には初めから入らないことになります。

朝鮮人については、朝鮮人のマルタ犠牲者は今まで 5 人見つかっているそうですが、ハルビン地域の特性から言うと、当時は日本国籍で 731 部隊に勤務された朝鮮人が働かされていたのではないかと思います。近藤さん、いかがですか。

(近藤昭二) 勤務されて参加しているのはいます。

(加藤) やはり朝鮮人労工もいたようですね。この中国人・朝鮮人は、厚生労働省の 3560 人には入っていない数字です。

1955 年に、二木秀雄らが校友会「精魂会」を作り、多磨盆地の精魂塔を建てて、そこに毎年 1 回 8 月に集まります。これが大体、森村篤一『悪魔の飽食』が書かれた 1980 年頃まで続いている。しかし精魂会の会員は、段々皆お年を召して亡くなっています。

この他に、「校友会」という、当時 731 部隊に 14, 5 師で雇われた少年兵の組織があります。こちらは若いですから、1990 年代まで存続しています。1990 年代に校友会、つまり少年兵たちが作った「校友会名簿」があるんですが、その名簿の中には、旧精魂会の人たちも全部入れたと書いてある。旧 731 部隊に関係した幹部たちの精魂会の名簿のほか、例えば飛行兵の波空会とかもあったのですが、そういう幾つかの同窓会組織をまとめた校友会の 1992 年名簿に出てるのは、亡くなった人を含めて 300 人弱です。

ということは、3560 人のうちの一割についてはある程度の事がわかっているけれども、残りの 3000 人以上の人们は、一体どうなってしまったのだろうかという問題が、まだ未解明の大きな問題です。なぜそうなったのかと迫りかけたのが、私の今度の本です。

7. 梅毒生体実験をした二木秀雄という中堅幹部医師

わかりやすくするために、まずは二木秀雄という男を紹介しておきます。彼は、近藤さんが作った 731 部隊の組織図の中で、2 か所で出てきます。ひとつは、総務部企画課長、もうひとつは基礎研究をやる第 1 部第 11 課の結核班長という形で出てきます。これがポイントです。

総務部企画課は何をするかというと、簡単に言えば、今の长春、当時の新京にあります関東軍の本部と連絡して、細菌戦を具体的に進める 731 部隊側の窓口です。さらに、731 部隊の細菌戦準備は、もともとは中國に対してよりも、ソ連との戦争を想定して進められた。そのためには彼は、ソ連諜報、ソ連情報を集めることで有能であったらしく、敗戦時は企画課長でした。

同時に医者として、第一部の結核班長になっています。結核というのは、あまり細菌戦には役に立たないので、彼は例えば安達のガス腹疽菌の人体実験にも携わっている。今までわかっている最も卑劣なのは、梅毒の生体実験です。彼は金沢医科大学の出身で、彼の先生が谷友次という梅毒研究、スピロヘータ研究の世界的權威です。二木自身の博士論文も梅毒です。それで、彼は結核ではあまりいい成果が出ないので、梅毒で人体実験をやるわけです。

梅毒の人体実験ってどうやるかと考えればわかるわけですけれども、極めておぞましいものです。ロシア人、中国人、モンゴル人等々のいわゆるマルタ、つまり特高警察や憲兵隊によって抗日分子とされた人たちを、裁判を通さないで 731 部隊に直接受け、そこで実験材料にする。その際二木がやっていたのは、マルタの中の男性と女性を組み合わせて梅毒実験をする。これはちょっと信じられないような話ですが、証言があります。

なぜ、それが必要だったのか。当時日本軍にとって、梅毒対策は深刻な問題でした。何よりも従軍慰安婦の人たちを通じて兵士に梅毒にならないようにしなくてはいけない。それから性病になった場合、兵士をどうするかという問題が出てくる。これを満州ハルビン地区で一手に引き受けたのが、二木秀雄です。結核・梅毒の生体実験をすることによって従軍慰安婦問題にもかかわったという事がわかつてきました。

8. 731 部隊の施設物資と金沢「仮本部」の設営

ところが二木秀雄は、戦後は自分の故郷金沢に帰って、1945 年の 8 月から 9 月に 731 部隊の仮本部を設営する。石井四郎がもともと金沢にあった旧制四高の出身で、それから京都帝大という関係もありまして、731 部隊には、金沢の関係者が非常に多いのです。二木秀雄の場合には生父の金沢っ子。45 年の 8 月から 9 月、この時期に仮本部の隊長になったのが、731 部隊のナンバーワンと當された増田知貞大佐です。彼も金沢出身ということで、金沢に 731 部隊の物資

と資金、データが大量に運び込まれました。

参謀本部から「731部隊の痕跡は地上から永遠に抹殺せよ」と言われたのに、自分たちがやった実験データを捨てるのももったいない、実験器具・ベストノミ爆弾は苦労して作ったから惜しいということで、膨大な物資・データを、まだソ連がハルビンまで攻め込む前に、特別列車を仕立てて釜山まで鉄道で迎んで、それから船で下関、門司、境港などの港へ入り、それらを金沢の近郊に隠すわけです。その中には医学実験ですから、白金とか銀のインゴットのような貴金属も入っていました。児玉巻士夫は、タンクステンなど軍の隠匿物資で稼いだ事で知られています。それと同じような貴重物資を、金沢の近辺、具体的には陸軍の施設や陸軍病院、金沢医科大学の倉庫とかに、一旦納めた。その受入責任者と思われるが、この二木秀雄と金沢医科大（後の金沢大）教授の石川太刀雄です。

しかもそれが45年9月下旬に、東京に近い所でないとGHQとの交渉が不便だという事で、千葉に移転します。石井四郎の故郷が千葉県の成田空港のそばですが、千葉県の船橋に本部「留守業務部」を移す。平房で総務部長だった太田澄と経理担当の佐藤重雄が責任者です。その際、二木秀雄は金沢に残ります。金沢医科大学には石川太刀雄という731部隊員で57人の生きた人間を解剖してそのデータを持ち帰った有名な医学博士がいました。この石川の解剖データが、米軍にとっては特に貴重なものとして、後に731部隊のデータが25万円で買い取られ免賃になるやいの、有力な取引材料になります。

この石川と二木が金沢に残って、金沢でのGHQ工作をやるわけです。その材料が、46年から『政界ジープ』になる雑誌の前身で、45年11月から『輿論』というローカル雑誌を作ります。何をやったかというと、「今世の中では、天皇制をどうするかが問題になっている。しかし、アメリカ民主主義のいいところは、政治は軍部や誰か個人の一言で決めるのではなくて、輿論に従って決める事だ。従って日本で天皇制をどうするかは、国民投票で決めよう」と掲載するのです。これはなかなかの名案で、当時、あらゆる世論調査で、9割以上は天皇制維持でした。共産党だけが天皇制廃止を唱っている。その時に、天皇制についての国民投票をやれば、絶対に天皇制を残せる、つまり国体が護持できるというのが二木流です。天皇制維持と原爆・原子力の平和利用の問題が、彼の雑誌の二本柱になります。

9. ジープ社社長として反共時局雑誌『政界ジープ』を10年間刊行

その後、二木秀雄は上京してジープ社社長となり、『政界ジープ』という雑誌を1946年から1956年まで10年間、約100号出します。これは、当時は時局雑誌と呼ばれましたが、今で言

えば週刊誌を考えて頂ければいいと思います。『週刊現代』とか『週刊ポスト』のようなものです。その中の右派のパクロ雑誌、スキヤンダール雑誌が『政界ジープ』です。左派にも似たようなのがあります。それは共産党员の佐和慶太郎が人民社から出した雑誌『真相』です。『真相』の方は、後に『噂の真相』というものが戦後もずっと出ますが、『噂の真相』のモデルになったのが『真相』です。これも、46年から57年まで、約100号出ています。

左派の『真相』に対して、右派の反共保守の側からその情報を打ち消す雑誌として『政界ジープ』が出ていた。もっと現代的にわかりやすく言えば、「森友問題」を『日刊ゲンダイ』が大きく報じていますね。それに対して『夕刊フジ』はあまり追及しない。『日刊ゲンダイ』の方が『真相』で、『夕刊フジ』に当たるのが『政界ジープ』と考えて頂くと、イメージとしてはわかりやすい。時局雑誌といつてもパクロ記事が売り物です。だからあることないことセンセーショナルに、漫画と写真をいっぱい使って、日々女性の裸のイラストも載せるという風な雑誌を、10年間出していました。

これは、当時のエロ・グロ・ナンセンスのカストリ雑誌とはやや異なります。戦後すぐに出た『世界』とか『展望』『潮流』のような論壇雑誌でもない。右の『政界ジープ』と左の『真相』が当時の2大時局雑誌だったので、私の今度の本の半分は『政界ジープ』対『真相』の占領期メディア研究になっています。そこでも731部隊が両方の雑誌にいろいろな形で関わってきましたが、今日はこの点は省略しておきます。

10.『医学のとびら』で厚生省に取り入り日本ブランドバンク社設立

二木秀雄は、『政界ジープ』を出すジープ社の社長として、いわゆる「逆コース」が鮮明になる1949年に、厚生省医務局編『医学のとびら』という新しい医師国家試験制度に向けた医学雑誌を出します。そればかりではなくて、49年には、厚生省、労働省、文部省、それから東京都、日教組の後援で『若き人々におくる性生活展』というのを開く。これは何かというと、ペピーブームで日本の子供たちが増えすぎた、これを何とか受胎調節で産児制限しようと言うのですけれど、彼自身、医学博士としては梅毒が専門です。731部隊で梅毒の人体実験をやった男が、戦後は若い人たちに正しい性教育をするというのです。それに日教組までが後援する。

その勢いに乗って、1950年に始めるのが日本ブランドバンク、後のミドリ十字の前身です。つまり朝鮮戦争が始まった時に、米軍の兵士が負傷して帰ってきます。その手術・輸血等々に使う乾燥血液剤が足りないということで、それを作る会社を始めます。二木秀雄と内藤良一、宮本光一（731部隊お抱えの日本特殊工業社長）

の3人で、話し合って始める。二木自身も取締役になります。おまけに731の関係者十人ほどを株主にします。北野政次（731部隊の2代目の隊長）を東京事務所長にして、後に取締役を迎える。内藤良一が会長になって、ミドリ十字を大会社にし、厚生省の天下り先になる。柴寄エイズが発覚した時、ちょうど内藤は亡くなつた後でしたが、731部隊の戦後の拠点だったことが問題になります。

要するに、731部隊の将校クラスを一方で同窓会「精魂会」に集める、他方で日本ブランドパンク・ミドリ十字を作つて、部隊の主だった人たちが再結集するきっかけを作るのが、この二木秀雄という男です。1955年に幹部の同窓会の精魂会を作つて、多磨盤園の精魂塔というミニ靖国神社風壇盤碑を作ります。

11. 戦後最大の恐喝事件「政界ジープ事件」被告から日本イスラム教団總裁に

二木秀雄は、『政界ジープ』は公称10万部ですけれども、勢いに乗つて『財界ジープ』とか『経済ジープ』という雑誌も出し始めて、出版ビジネスで大儲けしました。何をやるかといふと、中小企業とか地方銀行とかに行って「お前のところのこういうスキャンダルを握っている、書いてほしくなければ金を出せ」という取材名目での恐喝事件を起こします。1956年当時、戦後最大の恐喝事件といわれた「政界ジープ事件」です。当初の被害額は7000万円で、1956年3月に摘発されます。最終的には1969年まで、彼は刑事事件の被告です。高度経済成長期はずつと「政界ジープ事件」の被告で、地裁、高裁、最高裁と上訴しましたが、最高裁で「懲役3年」の確定判決が出て、前橋刑務所に収監されました。

隊友会「精魂会」を作つた翌年に、彼のビジネスの実像と逮捕が大々的に報道されたものですから、精魂会そのものは、二木を抜きにして運営されるようになります。二木はその間、闇の世界に入り込みます。スキャンダル記事を使った恐喝の仕方は、どこかで聞いたことがあると思いますけれども、後の総会屋、あるいは政治ゴロと呼ばれる人たちを生み出します。事実、1956年逮捕時の『政界ジープ』編集長は陸軍中野学校出身の久保俊弘という男で、その後政界ゴシップを扱う院内雑誌『国会ニュース』を出して、「金を出さないと記事にする」と脅して金儲けし、総会屋世界の黒幕、右翼の大物になつていきます。

二木秀雄自身も、小宮山重四郎という山梨県出身の自民党の衆議院議員がいましたが、彼とその兄の平和相互銀行頭取小宮山英蔵に寄生します。後に「平和相銀事件」という大スキャンダルを生み出しますが、「闇の紳士の貯金箱」とよばれた政界への献金で有名な銀行頭取と組んで、二木は裏世界で生きていくのです。

二木秀雄は1974年、懲役3年で出てきた後、医者に戻つて新宿ロイヤルクリニックという病院を、新宿の歌舞伎町に開きます。彼は梅毒・性病が専門ですから歌舞伎町になつたみたいです。同時にイスラム教に入信し、「大乗イスラム」を唱える日本イスラム教団をつくり、自ら總裁になります。新宿区役所の向いに大きな薬屋のビルがあり、その中にロイヤルクリニックを作つて、そのロイヤルクリニックにやって来た患者たちをイスラム教徒ということにして、当時のサウジアラビアとかイラクに布教資金援助を申請します。1975年は石油ショックで、日本に石油が入らなくて困つている時です。

日本イスラム教団總裁と称して、サダメ・フセインほかアラブの要人と話をつけ、日本への石油とオイルマネー導入をはかります。小宮山英蔵と組んで、オイルマネーによる新宿副都心開発を狙つた。ちょうどその頃森村誠一『悪魔の飽食』が出て、二木の名前も出でます。日本イスラム教団は一時的に繁栄しましたが、1992年に彼が亡くなり、自然消滅します。日本では先駆的なイスラム教の日本化の動きだったので、これを宗教史の素材として博士論文を書いている人が2人ほどいるのですが、私の分析では、実態は時局便乗の新興宗教ビジネスで、二木秀雄を眞面目な信仰者・宗教者として扱うのは間違ひだと思っています。

12. 第一段階「闇蔵」1945年—「徹底破壊焼却」から「一時個体・自宅待機」へ

こうした二木秀雄の動きと重なりあって、731部隊全体の隠蔽・免貸・復権が進みます。

隠蔽の段階は、1945年8月10日に大本營から「731部隊の痕跡はすべて地上から永久に抹殺せよ」という命令が来て、それに対して400人ともいわれますが、当時捕まっていた日本軍の捕虜マルタ（中国人、ロシア人等）をガス室や銃で皆殺しにして、灰を松花江に流して始末する。大量虐殺です。実験器具やデータは、大本營からは抹殺せよと言わされたけれども、こつそりと石井は持ち帰るわけです。

その際、「3つの旋」が作られました。これは、平房にいた1300人の731部隊の関係者にとっては、戦後生きしていくプロセスでずっと耳に残つている言葉で、各支部にも伝えられたようだから、これを守り切った人が、おそらく数千人はいただろうと思われます。

旋の第1は、「郷里に帰ったのちも、731部隊に在籍していた事実を秘匿し、軍服をかくすこと」、つまり731部隊にいた事を言つてはいけないということです。だからシベリアに抑留された人でも、731部隊所属を偽り、そのために早く帰れた人が、抑留者のなかにいるわけです。でもこれを生涯守り続けた人が圧倒的です。

2つ目は、「あらゆる公職につかぬこと」です。公務員とか公職に就けば、公の履歴書を出

さなくてはいけない。それにどう書くかという問題が出て来る、だから民間に就職しろと言う。ただしこれは、帰国直後から、破られていきます。1973年の精魂会の名簿を見ると、國公立大学の教授を含め、2割が公務員です。石井四郎ら軍医将校は公職に就かないが、他の人々は、生活のために公職でも就かざるをえなかつた。

とばっちりを受けた例を言いますと、1948年に帝銀事件がありますけれど、帝銀事件の犯人は731部隊など毒物を扱える軍隊の出身ではないかと捜査対象になる。警視庁は全国を回って、いわゆる731部隊関係者の聞き取りをします。そのうちの1人が、その時またまた中国に勤めていた。そしたら職場に警視庁が来て、「お前、帝銀事件の時に何をやっていた?」とアリバイを聞かれる。その人は、「いやアリバイがあります。ちゃんと働いていました」と答えるのですが、同時に警視庁は上司に「この男は、昔、満州731部隊にいた」と言ってしまうわけです。そのため職を失った例が出てきます。第2の犯、公務員になるなというのは、技師など中堅幹部達から率先して守られなくなっていくけれども、しかし一般隊員に対しては、よく効いた犯のようです。

3つ目、「隊員相互の連絡は厳禁する」というのがあります。731の軍歴を明らかにするな、公職に就くな、隊員相互の連絡をするな、これを厳密に守れば、731部隊員は、一生1人でこの3つの犯を守り続けて生きて行かなければならぬ。ところがそれもその後、変わって行きます。

1945年8月に「徹底爆破焼却、徹底防諜」と言われて、8月末には平房本部の1000人以上が帰ってくる。その時石井四郎は、増田知貞(当時の仮本部の代表)を通じて、釜山や下関で「自分の故郷へ帰れ。その代り、連絡先を残しておけ」と言って、名簿を作る。それで、北海道地方、東北地方、九州地方という様に、帰省先の都道府県ごとの詳しい名簿を作り、名簿は本部が独占する。「お前たちは相互に連絡を取るな」といいながら、731部隊の幹部たちは、一般隊員の連絡先を確保するのです。

8月の段階では直ちに解散すると言いましたが、やがて隠して秘密組織にしようとする。9月20日に、石井四郎が金沢の仮本部から『通告』という指示を出します。「お前たちをいったん退職させることにしたけれども、それを取り消す。今後も給料は払う。今後とも本部の方から、何らかの形で連絡が行くので、それは受けるように」という命令を出します。給料は、それを口止めのための「退職金」と受け取った人もいるのですが、月100円とか300円とかをもらった人が、実際に出てきます。平房にいた1300人については、そういう形で面倒を見て、部隊を解散もしない。秘密に731部隊を残しておく。

多くの一般隊員、特に少年隊員は、「一時帰休

命令、自宅待機」と受け止めました。

13. 帯団軍隊はなくなったのに、731部隊と「3つの犯」は残された

実際石井四郎は、実は朝鮮戦争の頃、警察予備隊ができる日本の再軍備が語られるようになると、細菌戦が必要になるということで、731部隊の再建を考えるわけです。ところが、他の幹部たちは、もう石井四郎に付き合うのは嫌だと言つて、誰も付いて来ない。これが日本ブランドパン創設の裏側です。朝鮮戦争では石井四郎は米軍に協力したみたいですが、他の幹部・中堅は日本ブランドパンや隊友会「精魂会」を作り、石井四郎から離れて行きます。私の本では「敬して遠ざける」と書きました。大体1949年から1950年です。

それによって、事実上、731部隊は自然消滅します。ただし軍隊の正式の解散命令が出た事が無いのが、731部隊です。他の軍隊は大体1945年8月末に武装解除されます。武器を米軍、ソ連軍ないし中国の国民党軍に渡して、軍隊として武装解除される。1945年12月には、陸軍省、海軍省が無くなります。つまり、帝国軍隊そのものが無くなる。つぎは引揚・復員だと言うことで、復員省という名前になり、今の厚生省に引き継がれます。

日本軍は1945年に完全に無くなつたはずなのに、731部隊は、その後も残されます。一部の地域の一時期ですが、戦後も給与まで払われていた不思議な部隊です。これと似たようなのを、ひとつだけ私は知っています。それは、陸軍中野学校です。これも解散命令がいつ出たかわからない。やがて日本は勝ると信じた中野学校卒業生たちが、東南アジアとかフィリピンで「残置諜者」になりました。中野学校出身の小野田寛夫少尉が、1974年にフィリピンで「まだ戦争は終わっていない」と信じて密林に潜んでいたのが見つかった。日本の厚生省は何をやつたかと言ふと、彼の元上官を連れて「既に日本軍は降伏した。貴君に対する軍の命令を解除する」と言って、ようやく出てきた。これに近い特殊な部隊が、731部隊でした。

このことが、さっき言った問題、つまりなぜ靖國神社に祀らないで、多磨盤園の小さな名前の無い精魂塔に集まるのかということと、関係するのです。731部隊の人たちは、自分たちは戦争で重要な役割を果たしたはずだ、天皇陛下の為にと信じて人体実験までやつたけれども、戦争が終わったら、逆に恥がないといけない存在になつた、旧軍人の中の日陰者、天皇の軍隊の鬼子とされたのが、731部隊でした。彼らは、いつか再び自分たちが必要になると信じて、戦い続けるつもりだったのです。だから一般兵士や少年兵たちは、敗戦後の帰郷を「一時帰休命令・自宅待機」と受け止めました。「3つの犯」は生き残ります。
(次号へ続く)

NPO法人

731資料センター

会報 第23号

[2017年7月20日発行]

「飽食した悪魔」の戦後(後半)

—731部隊の隠蔽・免責・復讐と二木秀雄

加藤哲郎 2

731部隊細菌戦「負の遺産」とどう向き合うか(第5回)

松井英介 16

陸上自衛隊衛生学校を覆う731部隊の影

宗須重雄 20



2017年7月7日、浙江省杭州市において「侵華日軍細菌戦罪行学術検討会」が開催された。王選さん、
莊啓儉さん(麗水)のほか湖南省常德市から常德細菌戦研究者の陳致遠さんらが参加した。

731部隊問題関連裁判の裁判日程 傍聴をお願いします！

- ①ビザ発給拒否・集会妨害国賠訴訟【民事1部】9月22日(木)10:30／東京地裁415号法廷
- ②情報公開裁判(衛生学校記事)【民事51部】第15回／9月26日(火)14:00／東京地裁419号法廷
- ③情報公開裁判(化学学校記事)【民事3部】第5回／10月11日(水)11:30／東京地裁522号法廷
- ④安倍靖国参拝違憲訴訟=控訴審第1回期日は未定【7月4日東京高裁に準備書面【控訴理由】を提出】
(①と④の裁判では浙江省と湖南省の細菌戦被害者も原告になっています)

【新刊のご案内】 加藤哲郎著

当センターでも扱っています！

「飽食した悪魔」の戦後

—731部隊と二木秀雄『政界ジープ』

花伝社 (2017年5月25日発行)

NPO法人 731部隊・細菌戦資料センター

共同代表 近藤昭二、王選、松井英介

〒105-0003 東京都港区西新橋1丁目21番5号 一瀬法律事務所

電話 03-3501-5558 FAX 03-3501-5565 Website <http://www.anti731saikinsen.net/>

「飽食した悪魔」の戦後(後半)

-731部隊の隠蔽・免責・復権と二木秀雄

2017年4月9日第6回総会・記念講演より



加藤哲郎 (一橋大学名誉教授)

(前号の続き)

14. 米軍第一次サンダース調査への隠蔽工作

このことのために、1945年中は、ずっと存在そのものを隠すことになります。石井四郎以下731部隊は満州に残っていると、幹部たちは口裏を合わせて偽装します。

1945年8月末に、アメリカは、731部隊の細菌兵器を調査するために第1次サンダース調査団を送ってきます。その後、第2次のトンブソン調査団、第3次のフェル調査団、第4次のヒル調査団と、1945年から47年まで4次にわたりアメリカ軍は731部隊を調査するための調査団を送ってきます。このことの関係で重要なのは、サンダースを日本で出迎えたのが、GHQという大きな占領軍の組織の中のGII、ウィロピー少将の率いる情報・諜報部隊だったことです。

なぜそうなったかと言うと、占領軍は当時、マッカーサー元帥が8月30日に到着するのに合わせて、その迎え入れのために最初に入るのが情報部隊なのです。その時、米軍占領下で、日本の細菌戦調査の手はずと世話、宿舎・食事から通訳・要員とか、どこへ行ったらいいという情報を持っているのが、参謀2部GIIでした。

それから相方の日本側窓口は、陸軍参謀2部、これも情報部で有末精三中将が管轄していました。要するに細菌戦の調査は、軍の情報部、インテリジェンスからスパイ謀略まで担当する部門に任された。しかも、第2次、第3次、第4次米軍調査団も、全部GIIの管轄下で行なわれるのです。

重要な事は、軍医が配属されたという意味では、GHQの中にはPHW(公衆衛生局)があつて細菌学者もいます。ESS(経済科学局)のなかにも生物学や生理学の学者がいます。しかし、731部隊の細菌戦の問題に限っては、情報部GIIが最初から最後まで扱うことになる。

「石井四郎がこっそり日本へ帰って来たけれ

ども、アメリカ軍は分からぬでいた」という話がありますが、それは半分正しく、半分間違いです。GHQのGIIだけは、早くに石井の所在をつかんで身柄を保護し管理している。

当時、戦争犯罪調査で石井四郎を捜していたのは、CICと言つて、対敵諜報部隊でした。これは当時CIS(民間情報局)のソープ准將の指揮下にあって、日本の非軍事化・民主化というポツダム宣言の忠実な実行にあたっていました。戦争犯罪を裁き、日本を民主化し、後には日本国憲法を作る路線で、GS(民政局)が中心になります。

それに対してGIIは、ソ連との対抗で、過度の民主化に反対する。例えば共産党員など政治犯の釈放に反対した。GIIのウィロピーのもとで731部隊の問題が処理されたことが、その後の免責交渉、復権の大きな土俵になるのです。そういう形で、731部隊がGIIの管轄下に入ったのが、きわめて重要です。

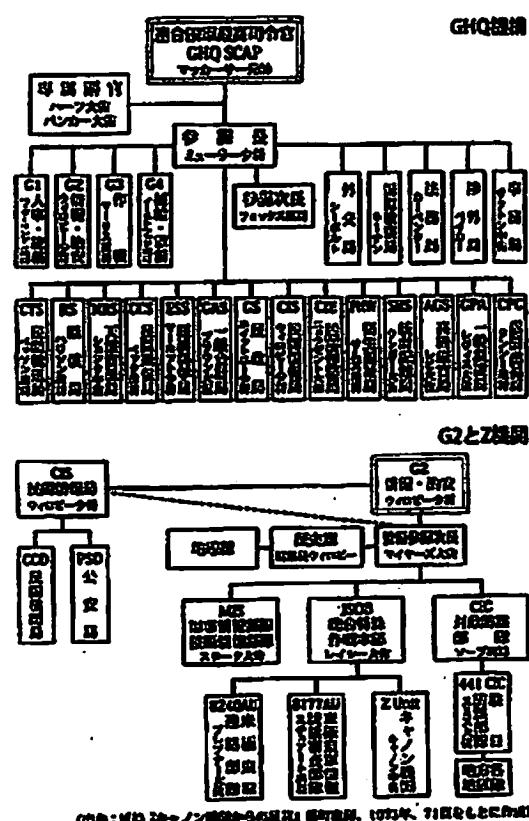
サンダースの調査に対して、細菌戦の研究はやっていたが攻撃用ではなく防御的研究だったというのが、直接尋問された増田知貞・新妻清一、通訳も兼ねた内藤良一、影で暗躍した有末精三、亀井貫一郎らの、米軍に対する口裏合わせの答えでした。しかし、サンダースの尋問を受けて、完全秘匿ではなく細菌学の調査だとサンダースがいうので、石井四郎はまだ隠れていますが、内藤良一らは、人体実験とベストノミ爆弾だけは隠して、平房の研究についてはむしろ積極的に供述して米軍に取り入り、戦争犯罪としての訴追を迷れる方向に転換します。米軍GII関係者を宴会・パーティで接待して、恭順を示します。

翌1946年1月になると、第2次トンブソン調査団がやってきて、石井の身柄を隠しきれなくなったGIIが、CICに石井四郎と中国から召喚された第二代隊長北野政次の尋問を許します。ただし、北野帰國に際して作られた関係者の意

思統一「北野中将へ連絡事項」というのがあり、話していいことと隠すべきことの振り分けが行われます。これが、隠蔽から免責への転換点になります。

15. 第二段階「免費」—GII管轄によるトンプソン調査、国際検察局、法務局捜査への妨害

1946年1-3月のトンプソン調査団にも、口裏合わせは通じました。トンプソンは、石井も北野も尋問できて731部隊の概略は把握できたのですが、人体実験と細菌戦の実行には踏み込むことができませんでした。尋問のすべてに、必ずGII(参謀二部)が立ち会いました。ソープ准将指揮下のCIS(民間情報部)戦犯調査にも石井は応じましたが、これもGIIを通じてです。つまり、米軍の中で、石井を囲い込んだウィロビーの反共謀略部隊と、非軍事化・民主化を進めるホイットニー・ケーディスのGSやソープ准将の治安・警察部隊がせめぎあっている状況です。石井はGIIの管轄下にあるものですから、戦犯として訴追しようとするCISへの防壁になる。1946年5月には、GIIウィロビーの策略で、CISソープ准将が解任され、CISとCIC(対敵防諺部隊)もGIIウィロビーの支配下に入ります。ウィロビーの勝利で、GIIは、GHQ内で巨大な権力を掌握しました。



ただし GHQ は、米軍兵士だけでも 40 万人以上の、巨大な占領機関です。当時戦犯追及をやっていたのは、CIS・CIC だけではありません。レジメに GHQ の組織図を入れておきましたけれども、いろいろな部局があるわけです。

その中に、国際検察局（IPS）というのがあります。これは、極東国際軍事裁判（東京裁判）のために特別に作られた部局で、誰が国家犯罪としての日本の戦争に重要な責任を持ったのか調べる部署です。

このIPSのモロウ大佐も、満州侵略や南京虐殺など日中戦争との関連で731部隊に注目し、石井四郎以下を尋問しようとした。そうするとGIIは、石井四郎たちはGIIの「絶対的管轄下にある」と言って、直接尋問を許さない。結局中国で現地調査まで行ったのに、国際検察局、つまり極東国際軍事裁判の被告を決める作業の中では、石井四郎は起訴されないことになる。

そればかりではありません。やはり GHQ の中に、法務局 (LS) というのがあります。国際検察局 (IPS) は、極東国際軍事裁判で A 級戦犯「平和に対する罪」を主に扱うのに対して、法務局は、BC 級戦犯、B 項「通例の戦争犯罪」と C 項「人道に対する罪」の直接の実行犯、捕虜を虐待したり銃殺したりした軍人たちを捜査していました。

いわゆる BC 級戦犯は、A 級にくらべ重要ではないという意味ではなく、従来の国際法でも規定されていた罪を裁くもので、それは GHQ の中で法務局（LS）がやっていたわけです。この頃、法務局にはいろいろな投審が来まして、「九州に石井部隊というのがあり、そこで人体実験をしていた」などという告発記録が積み重なっていたので、法務局のスミス中佐たちが、731 部隊の人体実験を調べようとした。しかしこれも、G II のウイロピーが「731 部隊の事は自分たちが調べているから任せてくれ」と妨害し、証拠集めが出来なくなる。それで、スミス中佐たちは、戦時中米軍機が墜落し、その搭乗員を捕らえて九州大学で解剖した事件（九大米兵解剖事件）を起訴することで、人体実験の代表にする。

つまり、石井四郎を隠していた段階から、日本にいることが表に出た段階で、国際検察局や法務局が「石井四郎たちが怪しい」と捜査を始めたけれども、それをGIIが妨害して石井と731部隊を守った、というのが免責の次の局面です。この頃、二木秀雄は『政界ジープ』という、タイトルそのものに進駐軍のジープを使う時局雑誌を出して、GHQに迎合する。最高時自称10万部で、医薬企業の広告が多く、側面から最高

幹部の免資工作を助けていました。

16. フェル、ヒル調査団への25万円での細菌戦データ提供による免費

免費の最後の段階は、今までの占領軍対日本人関係者とは構図が違って、東西冷戦の始まりにより国際的です。ソ連で抑留された60万人の中で、川島清中将や柄沢十三夫中佐が捕まって、731部隊で細菌戦をやっていた、人体実験があったと具体的な供述を始める。その情報を、連合軍の一員であるソ連が、「これは重大な戦争犯罪だ」と、GHQを実質的に支配するアメリカに伝えて、石井四郎と菊池章（ひとし）少将、太田澄大佐の有力幹部3人の身柄引き渡しと尋問を要求します。1947年初めのことです。

極東国際軍事裁判の国際検察局（IPS）には、アメリカほか12か国の検事たちで構成され、ソ連側検事も入っている。ソ連側検事団が、そこに731部隊の問題を持ち出してきたのです。ソ連側が石井尋問を要求して国際問題になりそうだということで、マッカーサーの占領軍の総元締めであるワシントンの3省調整委員会（国務省、陸軍省、海軍省）で、方針を検討することになった。ウィロビーたちがいろいろ電報を送って、ソ連側に石井四郎を尋問させていいかどうかと問い合わせるわけです。

結論を言えば、ソ連はアメリカ側立会のうえで3人の尋問ができましたが、米軍GIIによりあらかじめ答えていい範囲が予行演習されており、尋問にもGIIが立ち会って、ソ連側は成果がありませんでした。アメリカ側は、「彼らを戦争犯にするよりも、彼らが持っているデータが、ナチス・ドイツが持っていたデータよりも有益なものであるならば、彼らのデータをソ連に渡さず独占することを優先して、彼らを戦犯にする必要はない」という免費の決定が出る。石井四郎はそれを「文書で約束しろ」と要求したのですが、さすがにそれにはワシントンの国務省が反対して、文書にはなりませんでした。要するに、人体実験・細菌戦データを731部隊幹部が米国に提供すれば戦犯にしないという約束が、ソ連側の間合せをきっかけに、47年に決まるわけです。

そのため米軍は、第3次フェル調査団、第4次ヒル＝ヴィクター調査団という、サンダースやトンプソンよりはるかに権限の大きい細菌戦専門の調査団がやって来て、731医師たちを次々に尋問する。この段階で、石井四郎以下主だった幹部たちは、率先してアメリカ側に情報を提供し、実際ナチス・ドイツよりも細菌戦では進んでいたと認められたため、戦犯にならないで

済むのです。特に金沢医科大学の石川太刀雄の集めた人体実験データの標本は非常に価値があり、アメリカは、フェル博士が19人、ヒル博士は数十人の医師・医学者たちから詳細な証言とデータを得る。この総費用が25万円、今のお金にすると2500万円ぐらいになるでしょうか。多くの731部隊の医者たちを料亭やホテルでもてなすことまでやって、アメリカは731部隊の細菌戦データを独占します。

米国側のヒル＝ヴィクター調査団の最終報告書には、「この調査で収集された証拠は、この分野のこれまでにわかつていていた諸侧面を大いに補充し豊富にした。それは、日本の科学者が数百万ドルと長い歳月をかけて得たデータである。情報は、特定の細菌の感染量で示されているこれらの疾病に対する人間の罹病性に関するものである。かような情報は我々自身の研究所では得ることができなかつたものである。なぜなら、人間に対する実験には疑惑があるからである。これらのデータは今日まで総額25万円で確保されたのであり、研究にかかった実際の費用に比べれば微々たる額である」と書かれた。

東京裁判そのものは、48年11月に結審するのですが、その前の47年12月段階で、ほぼ731部隊の免費・不訴追が、米軍によって保証されることになります。二木秀雄も、このヒル、フェル調査団に協力し尋問を受けましたが、すでに出版ビジネスに入った結核菌担当ということで、毎回人体実験や総務部企画課長の尋問はなく、臨役にとどまりました。

17. 帝銀事件捜査に協力した731部隊の実質的解散

こうして1947年末には、731部隊の免費・戦犯不訴追がほぼ決まるのですが、1つだけややこしい問題が起きました。48年1月に起きた帝銀事件です。池袋に近い帝國銀行椎名町支店に、占領軍の衛生調査だと称して、厚生省の松井という名刺を持った犯人が、行員たち16人に2回に分けて薬を飲ませて、12人が亡くなるという大量毒殺事件です。その時残った重要な物証は二つです。ひとつは松井という名刺、ところが厚生省の松井氏には犯行時に明確なアリバイがあり、百数十枚の名刺を配ったことはあるが、犯人ではないことははっきりしていた。それで彼が渡した名刺の相手でその名刺を持っていない人物が怪しいということになった。そこで警視庁の捜査員は、松井の記憶にもとづき渡した相手をたどって「松井さんの名刺をあなたはお持ちですか」と聞くわけです。それで松井名刺が出てくればOK。つまり帝銀事件で使われたものではないことになる。それで次々に松井の交友関係が漁されてゆく。

もうひとつの物的証拠は、コップに入れて二度に分けて飲ませた青酸化合物です。青酸カリだと即死なのに、すぐには効かない（遅効性）青酸化合物でした。青酸ニトリールと言われていますが、そうした特殊な青酸化合物を扱える日本人が捜査の対象になる。これで 731 部隊関係者、それから川崎の登戸研究所、千葉の習志野研究所等々、旧軍隊の中で進物研究をやっていた特殊機関の関係者が、広く捜査の対象になります。当然のことながら、731 部隊の石井四郎たちも監視庁の尋問を受ける。731 部隊は、45 年 8 月に帰国するときに全員に青酸カリを配つて、「いざというときには、これで自殺せよ」という事までやっていますから、一般隊員でも、青酸化合物を持っていました。その関係で、石井四郎は、「自分の部下に犯人がいそうだ」と 48 年 7 月頃に言い出す。

ところがその段階で、また G II のウィロビー少将の方から、待ったがかかります。ウィロビー一直属の G II 歴史課で当時使われていた、旧参謀本部の情報特科だった有宋精三と服部卓四郎の 2 人が、なぜか監視庁に乗り込んで、「この軍関係のルートの捜査は占領軍の所管なので中止せよ」という命令を伝える。国際問題になるからと骨すのです。

のために、監視庁の捜査方針は、有力だった青酸ルートの捜査はやむなく断念・中止して、もう一度、松井名刺に絞ることになった。その松井名刺を追っかけて、松井と会ったことがあるが松井名刺は紛失したという面家の男が、8 月に逮捕された。それが平沢貞通で、後に自白だけをもとにして死刑囚になる。青酸は絶対を作るために使ったということにして、何らの物証もなく、強制された自供だけで、平沢貞通が犯人にされてしまう。731 部隊から真犯人が出なかつたから、生贊として監視庁に逮捕され、そのまま死刑が確定し、獄中で病死してしまう。真犯人はわかりませんが、平沢の冤罪はほぼまちがいなく、現在でも再審請求が続いているのはご存じと思います。

不幸なことに、ちょうどこの 1948 年 6 月に新しい刑事訴訟法ができる「自白だけでは証拠にならない」ことになるのですが、1 月の帝銀事件当時は、まだ自白中心の旧刑事訴訟法が生きていた。そのため、冤罪事件が、その後に残されることになるのです。

731 部隊関係者の手記を見ると、帝銀事件の犯人は 731 の仲間じやないか、自分も帝銀事件で調べられると思った、と書いている人がいる。実際に捜査員が職場にきて、軍服がばれて仕事を失った元隊員もいた。「瀬戸では日常的に捜査

を扱っていたから、自分の所にも来るんじゃないかと思った。ところが来なかつたからほっとした。それで秘密を守り続けた」という人がいる一方、「自分たちの所には 45 年に 1 回月給が払われてから、何回か配られたことがあつたが、その後全然配られなくなった。帝銀事件の真犯人も、もう見捨てられたと思って犯行に及んだのではないか」と考えた関係者もいた。

石井四郎や二木秀雄を含むほとんどの関係者が警察捜査に協力しましたが、この段階では連絡網も機能せず、口裏合わせもできなかつた。個別に GHQ に投書や告げ口をしたり、石井四郎の悪口を言い出す隊員もでてきた。懇意資金や物資も乏しくなつて、幹部も一般隊員も、みな自分の生活のために必死です。

この帝銀事件を、私は、事実上の 731 部隊の解散と考えました。帝銀事件をきっかけにして、ようやく戦犯訴追を逃れた中堅幹部達も、秘密を守り続ける一般隊員も、それぞれ勝手に動き始めた。幹部医師の中からさえ、みんな石井四郎の命令でやつたと石井四郎一人に責任を押し付ける声が出てくる。ちょうど東西冷戦がはつきりし、いわゆる「逆コース」が始まる頃です。

18. 第三段階「復権」 公衆衛生福祉局 (PHW) サムス准将の 731 國籍登用

最後の復権の問題については、GHQ の G II ウィロビー少将のルートと共に、PHW (公衆衛生福祉局) サムス准将の医療改革を通じたルートを、私の本では重視しています。

確かに G II は、石井四郎を戦犯捜査から庇護して免責し、朝鮮戦争でアメリカの細菌戦に使つた可能性があります。隠蔽・免責過程で暗躍した池井貞一郎という黒幕政治家は、自ら G II の反共謀略活動に加わり、後には CIA に協力したと自伝で述べています。二木秀雄の場合は、GHQ の G II でなければ知りえない情報、ゾルゲ事件の米軍独自調査情報や反共情報、共産党内部の怪文書などを、『政界ジープ』で報道しています。

ただし G II は、諜報・治安部隊ですから、731 部隊出身者を隠蔽・免責するうえでは大きな役割を果たしましたが、戦後社会で隊員たちが生きていく上の復権・復活には、積極的役割は果たせませんでした。

復権、特に 731 部隊関係者が歴史の舞臺に絶対に出るなど命じられたのに、戦後医学界などで復活し活躍するようになるにあたっては、占領軍の中の PHW (公衆衛生福祉局) のサムス准将の下で行われた医療改革が重要なと思ひます。これについては、『サムス准将の改革』とい

う回想録が出ています。これは、竹前栄治さんが訳して岩波書店から出た『DDT革命』というタイトルの改訂版です。DDT革命というのは、伝染病・感染症対策のために、今なら環境汚染で禁止される有機塩素系殺虫剤 DDTを、復員してきた兵士やノミ・シラミが多い子供たちにかけ、地域によっては空から撒きまいた衛生対策でした。

今出ている日本の医療史・社会福祉研究の中では、サムス准将は「医療民主化の父」「日本の福祉の父」と評価されている。生活保護法や学校給食を作ってくれたのはこの人だという事になっている。概して医者とか福祉研究の人たちには評判がいい。

私に言わせると、サムス准将は、それまでのドイツ型医学をアメリカ型医学に切り替えるうえでは大きな役割を果たしましたけれども、何よりも軍人なわけです。アメリカの占領軍軍人で一番高い地位の軍医です。サムス准将の管轄下で行われたいろいろな改革が、結局は731医学の復権につながったというのが、私の考え方です。

19. 原爆被爆調査と伝染病・感染症対策

サムス准将のPHWがやったことと、731部隊の復権における関わりを、6つ挙げます。

1つは、原爆被爆調査、広島・長崎の原爆投下の後、勝利した米軍が調査に入ります。これもサムスに言わせると、「米軍人だけで入ると、我々が襲われたり放射能を浴びる可能性があるので、出来るだけ危ない所には日本人を行かせた」というのです。被害者の調査でデータは取ったけれども、何の治療もしなかったのが、有名な原爆調査です。これを総指揮していたのがサムス准将で、それに石川太刀雄、緒方富雄、渡辺鹿、木村廉、小島三郎、田宮猛雄、御園生圭輔、貞政昭二郎等々、731部隊関係者が10人ほど関係しています。この人たちは、それまでは日本軍の細菌戦を進めていたのに、今度は雇い主を換えて、米軍の原爆調査、「治療なき人体実験データ収集」を忠実に実行するわけです。

2つ目のルートは、伝染病・感染症対策です。占領期のサムスは、「我々が着いた国は、恐ろしく不衛生で貧しい国であった」といいます。そこにアメリカ軍の若く健康な兵士40万人を連れてきたわけです。そしたら米軍にとって最大の任務は、まずは不潔な日本人の伝染病からアメリカ軍人を守ることでした。そのために散布されたのがDDTです。

それから、日本脳炎、赤痢、疫病等々（日本脳炎で1945年から48年の間に亡くなっているのは2

万人、赤痢、疫病で亡くなっているのが1万5千人前後）のワクチンを作り予防しなければならない。当時の日本で感染症対策の仕事をやっていたのは、軍の防疫給水部731部隊のほかに、東京大学伝染病研究所がありました。ところが東大伝研は、京大医学部と並んで、731部隊に医師を送り出す最大の供給基地のひとつでした。その東大伝研で予防措置とワクチン製造をやらせて、サムスの命令で伝研を分割し、厚生省の予防衛生研究所（予研）というもうひとつの研究所を作って、ワクチンの審査その他をまかせる。

この伝研・予研の双方に携わった医者の非常に多くが、731部隊の関係者です。日本医学界の大ボスであった宮川米次（第五代伝研所長）、田宮猛雄（第七代で予研改組時所長）のほか、細谷省吾、小島三郎、柳澤謙、安東洪次、緒方富雄、浅沼靖らが戰後は伝研に籍をおきます。小島三郎と柳澤謙は、伝研から予研に移って、第二代・第五代の所長となる。特に小島三郎ら朱1644部隊からの帰還者は、予研に戻ったケースが多い。朝比奈正二郎、小林六造（初代所長）、福見秀雄（第六代所長）、村田良介（1644部隊、第七代所長）、宍戸亮（第八代所長）、北岡正見、堀口哲夫、若松有次郎（第100部隊）、黒川正身、江島真平、八木沢行正ら、予研の中心には731部隊関係者が多いのです。その他民間研究所を含め30~40人の元隊員が伝染病・感染症対策に携わる。これが第2の復権ルートで、米軍人の健康を守るために対策で、ツベルクリンやBCG接種、ペニシリンやストレプトマイシンが入って、日本人の健康も守られる。その陰で、731部隊関係者が米軍によって使われます。

20. 医学教育・厚生省を通じて審査した731部隊関係者

第3が医学教育・医学部改革です。それまでのドイツ型高等教育をやめて、医学部だけ6年制の新制大学を作ります。1年間インターンをして、それから医者になっていく制度に統一される。この制度を作ったのが、サムス准将です。そういう医学制度・医師国家試験の改革には、旧帝大の医学部の先生方の協力が、どうしても必要になる。旧帝大の有力な教授達の多くは731部隊関係者で、本人は嘱託であっても、弟子たちを満州へ送り出していたわけです。この関係で、国立大学や私立・公立大学医学部や国立研究所の教授や國公立機関の公務員になっていったのが、数十人います。

軍医は民主化の進む大学に簡単には戻れなかつたのですが、軍属の技師は、ほとんどが大学に戻りました。講演では名前を挙げませんでし

たが、著書の方では、大学別に東大（田宮猛雄、小島三郎、福見秀雄、細谷省吾、安東洪次、緒方富雄、宮川正、所安夫）、京大（木村廉、正路倫之助、岡本耕造、渋正雄、内野仙治、浜田良雄、蒼生規矩、笹川久吾、浜田稔）、東北大（岡本耕造、加藤陸奥雄）、名古屋大（小川透）、大阪大（藤野恒三郎、谷口典二、木下良順、大月明、岩田茂、渡辺栄）、東京工業大（河島千尋）、埼玉医大（宮川正）、慶應大（安東清、児玉鴻、早川清、三井但夫）、金沢大（戸田正三、石川太刀雄、谷友次、齊藤幸一郎）、京都府立医大（吉村寿人）、大阪市大（田中英雄）、大阪医科大（山中太木）、兵庫医大（田部井和）、名古屋市大（内野仙治、小川透）、信州大（野田金次郎、田崎忠勝）、三重大（潮風末雄）、大阪教育大（篠田統）、岡山大（妹尾左和丸）、九州大（山田泰）、長崎大（青木義勇）、長崎医大（林一郎、齊藤幸一郎）、熊本大（園口忠男、山田秀一、久保久雄）、久留米大（稗田徳太郎）、熊本医大（波多野輔久）、順天堂大（小酒井望、土屋毅）、日本歯科大（広木彦吉）、昭和薬科大（草味正夫）、帝京大（所安夫）、東京水産大（安川＝関根隆）、防衛医大（増田美保）等々、と記しました。

こうした人々は、サムスの PHW と厚生省の双方に協力し、占領期の医療制度改革・福祉改革の助言者・顧問、各種委員会・審議会の委員になって医学界の権威となり、「白い巨塔」を支配していく。その他に、長友浪男が北海道衛生部長から副知事まで上り詰めるのを頂点にして、文部省に入る植村泰、横浜市衛生局長になる山田秀一、岩手県薬検定所長となる松田達雄らが公務員になる。東京都知事となる鈴木俊一も、内務省官僚として一時 731 部隊山西省分遣隊主計部に在籍したから部隊関係者といえるのではないか、と挙げておきました。

21. 石井四郎らは開業医に、サムスの特例で公職追放を逃れた病院勤務医・開業医

第 4 のルートは、病院勤務医・開業医です。戦後の医師法改正によっても、戦前の医学博士の学位や医師資格は有効でした。戦後の日本は、圧倒的に医師が不足していました。そのために、医師を新制医学教育で育てるだけでは足りなかった。陸軍病院・海軍病院を国立病院にしても、圧倒的に医師が不足していました。そこで当時、軍隊で少尉以上だった将校はすべて公職追放されたのですが、軍医についてだけは、サムス准将が自伝の中で誇らしげに述べているのですが、マッカーサーと GS (民政局) ホイットニーに願い出て、中佐以下 (中佐、少佐、大尉、中尉、少尉) は公職追放の特例扱いとし、国公立病院

に勤務してもいいという事にした。それで、日本の医療を救ったといいます。

この病院勤務・開業医が4つ目の復権ルートで、大変多い。石井四郎・増田知貞・菊池齊・太田澄・内藤良一ら軍医将校だった幹部たちは、だいたい開業医になる。二木秀雄も1950年に医師に戻ります。国立東京第一病院の大塚憲二郎、大阪日赤病院の工藤忠雄、国立岡山療養所の小坂惣、東京都立母子保健院の平山辰夫、国立都城病院の篠原岩助、県立都城病院の宮原光則、銚子市立病院の鈴木壱らは国公立病院に職を得た。そのほか本にいましたが、「精魂会」隊友会名簿など各種名簿をも参照すると、高橋正彦、江口豊雄、野口圭一、伊藤丈夫、景山祐祐、加藤真一、可知栄、貴宝院秋雄、倉内喜久雄、児玉鴻、限元国夫、高橋伝、竹広登、巽庄司、田中淳雄、中田秋市、中野信雄、夏目亦三郎、野呂文彦、早川清、羽山義雄、肥野藤信三、橋渡喜一、北条円了、細谷博、松下元、三留光男、平山忠行、高橋僧、池田苗夫、渡辺康、渡辺栄、小林勝三、大石一朗、三木良英、中野新らが開業医ないし病院勤務医になった。ソ連ハバロフスク裁判の被告だった川島清は、56 年帰国後に千葉県八街市少年院医師、西俊英は東京で開業医になった。瀬陽裁判被告の梯原秀夫は、山口県で病院勤務医になったようです。

22. ミドリ十字など医療ビジネス、米軍407部隊とのつながり

第5のルートは、医薬産業・医療ビジネスです。ここで二木秀雄は、大変重要な役割を果たします。731部隊には、薬学博士もいますし歯医もいた。薬や検査機器など医療機器も膨大なものを持っていました。特に細菌爆弾を製造した日本特殊工業の宮本光一らは、731部隊に寄生して大儲けをした。内藤良一は、戦後は一時期東芝生物理化学研究所新潟支部長を勤め、郷里の京都に戻り小児科医をしてから、二木秀雄・宮本光一と共に日本ブランドパンクを創設する。武田薬品研究部長となつた金沢誠一、日本製紙の国行昌頼、興和薬品の山内忠重、日本医薬工場長の若松有次郎らは、製薬業界に入った。鈴木重雄 (後に精魂会専務局) の東京衛材研究所、早川清の早川予防衛生研究所、八木沢行正の抗生物質協会、日黒正彦・康雄の日黒研究所、加藤勝也の名古屋公衆医学研究所なども、医薬業界の一部でしょう。そしてこの業界は、もともと厚生省官僚の格好の天下り先で、東大教授等を経た医学者たちが顧問などの名目で迎えられる民間就職先でした。731部隊関係でも、例えば安東洪次は伝研教授から武田薬品顧問となります。金子順一も、予研から武田薬品です。

こうした医薬業界に、出版業の二木秀雄は、『政界ジープ』創刊時から広告取りで手を広げていました。また731部隊の重要な実験資材・機器納入業者であった日本特殊工業は、社長の宮本光一が石井四郎の隠蔽から免責までの陰のパトロンとなり、自宅・別宅を隠れ家や秘密会議用に提供して、幹部たちの戦後を援助してきました。

今日731部隊の戦後の象徴とされる日本ブランドパンク創設からミドリ十字、薬害エイズ事件にいたる流れは、この医療ビジネスに関わった内藤良一、二木秀雄、宮本光一の発案によるものでした。そしてそれは、設立時株主に野口圭一、太田澄、佐藤重雄、石川太刀雄、星野隆一、谷友次ら、後に東京プラント所長・役員になる北野政次、京都プラント所長・役員になる大田黒猪一郎、陸上自衛隊衛生学校と兼任でミドリ十字に関わる圓口忠男らを迎えて入れ、医学者・医師として立ち直った旧731部隊関係者の復権拠点、ネットワーク再造の核となります。サムスの医療改革、医療民主化の陰で、731部隊の医師・医学者が大量に登用され、復権していくのが、日本の占領の悲しい現実でした。

そればかりではなくて、占領した米軍の中に406細菌戦部隊があり、その研究所が横浜にありました。ここに100人ほど日本人が使われていたといわれます。これが第6の復権ルートだった可能性があります。去年アメリカ国立公文書館で調べて米軍医たちの名簿はありましたが、残念ながら、日本人協力者・雇用者の記録は見つかりませんでした。おそらく北野政次は、ミドリ十字の前に、これに關係していただろうと思われますが、証拠が無かったので、今回の本では使えませんでした。この米軍406細菌戦部隊と731部隊のはつきりしたつながりは、実験動物です。埼玉県春日部の近くに731部隊でノミを培養するためのラット・マウスなどネズミを大量に納入していた村があるのですが、その村で飼育されたネズミたちは、731部隊資材担当だった小林幸吉らが戦後に日本実験動物総合研究所を作って、取引先を日本軍から米軍に乗り換え、米軍406部隊に納入されました。

23. 復権における二木秀雄と『政界ジープ』の役割

PHWと厚生省を介した731部隊の復権の要所要所で、二木秀雄が重要な役割を果たします。ひとつは、前に述べた雑誌の広告です。それから厚生省医務局へ取り入って『医学のとびら』という医学雑誌を出します。時局雑誌で稼いだお金で医学雑誌を作り、そこに731部隊関係者、石川太刀雄や猪方富雄を登場させ、医薬産業か

らまた広告を取ります。

『政界ジープ』に載った『医学のとびら』(初期は『とびら』)の広告があります。この厚生省医務局の雑誌を編集するために、二木秀雄は、ジープ社内に総合科学研究会という学術的体裁の組織を作ります。この総合科学研究会は、49年の秋に、浅草松屋で「若いにおくる性生活展」を主催します。後援という所には、厚生省、文部省、労働省、東京都、日教組が入っています。日教組は生まれて3年目、「戦場へ再び教え子を送るな」と言い出す2年前です。

インター生の雑誌

厚生省医務局

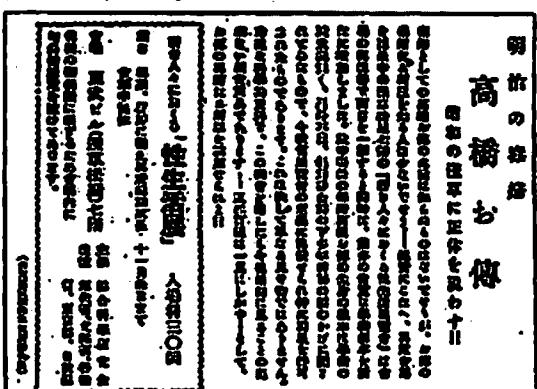
とびら

政治の裏で政治の打ち手もくくら全国握手の毎日
に通じ、ささやかな話でも何でもことごとく
本音を語る連日である。

定期50円 増刊30円
1ヶ月600円

発行元 総合科学研究会
東京8709 TEL. 571-1288

民主主義のもとで、性教育は必要だ、受胎調節や性病も教えた方がいいとして厚生省が任せた相手が、731部隊で梅毒人体実験までした二木秀雄だったのです。しかも、実際に行われた展覧会の記録が『政界ジープ』に載っているのですが、その目玉は「高橋お伝」という明治の斬奇殺人事件の犯人とされた女性の局部標本です。東京帝国大学医学部が生まれたばかりの時に日本で本格的な医学的解剖をやった重要な資料なのですが、それは、女性で犯罪を起こすものは性器に外形的特徴があるという、石井四郎の恩師である京都大学・清野謙次博士の学説のもとになった標本です。それがずっと東大医学部の研究室に保存されていたのですが、その後、陸軍衛生学校に入っていたものを、戦後は二木秀雄が手に入れ展示するのです。この展示のために一室を設けた。それだけを見たくて来た人もいたようです。



お伝の標本が公開された「性生活展」の広告



その直後、1949年12月に、ソ連でハバロフスク裁判が公開で行われます。川島清や柄澤十三夫、西俊英らの供述が、タス通信等で生々しく報じられました。すぐに公判書類も7カ国語で出版される。その際、ソ連は、石井四郎や昭和天皇の戦犯裁判を主張したため、アメリカは公式に拒否します。ソ連の裁判はでっち上げで信用できないと発表する。ソ連では、1930年代からスターリンの下で、ジノビエフ、ブハーリンらを「人民の敵」に仕立てるフレームアップ肅清裁判が何回もやられていました、だからこの細菌戦裁判もでっち上げであると声明して、裁判そのものを否定する。極東国際軍事裁判のキーナン主任検事らも、もう連合国との戦犯裁判は終わった、ソ連が単独でやった裁判は認められないと言う。

そのため、日本の大新聞にニュースだけは載りましたが、ほとんど後追いがない。ところが『レポート』『真相』のような時局雑誌は、大新聞に載っていないスクープと称して、731部隊が人体実験をやった、と大々的なバクロ記事にするのです。

その中で、『政界ジープ』のライバル雑誌、左派の『真相』は「内地に生きている細菌部隊」を特集し、二木秀雄の写真入りで、ジープ社の二木秀雄は石井四郎の側近で、満州では人体実験をしていたと書きます。それで、彼の経歴が

明らかになる。『政界ジープ』は、すぐにそれに反論して、ソ連の裁判は共産主義の謀略だと批判する。ちょうど日本共産党が分裂する時期で、二木にとっては幸いなことに、『真相』は社内の共産党員の分裂で、まもなく休刊になる。

朝鮮戦争が始まると、『政界ジープ』52年4月号に、とんでもない記事が出ます。第3次世界大戦では、原爆による都市攻撃のほか、農村や山岳地帯では細菌戦が重要になるという主張です。山本容というペンネームですが、二木秀雄ないし731部隊関係者でなければ書けない「地球の上に蚕が降る」という論文が掲載されます。

朝鮮半島や中国の奥地は山が多く人口も分散している、そういう所では、原爆はあまり効果がない。ゲリラ戦の方が有効である。ゲリラ戦には、原爆のような大量破壊兵器はあまり役に立たない、ペストノミを撒く方がはるかに有効である、という主張です。だから現代戦、第3次世界大戦以後の戦争は、原爆と生物兵器・化学兵器の組み合わせになると主張した論文です。これは、まさに ABC 兵器で、最近のシリアや北朝鮮の話にピッタリつながります。実際、朝鮮戦争でも細菌が使われた可能性が高いわけです。そういうことを、二木が開き直って、『政界ジープ』で生物兵器の必要性を公然と説くようになりました。これが、731 部隊の、最後の時局雑誌上での復権になります。



二木秀雄の「精魂社」、隊友会「精魂会」、慰靈塔「精魂塔」

1950 年の日本ブラッドバンク創設に加わった二木秀雄は、1953 年に『政界ジープ』の発行元を「精魂社」という別会社にします。その延長上で、1955 年に「精魂会」と多磨霊園「精魂塔」が作られる。この精魂会の慰靈塔は 151 万円かかったとのことです。二木の私費による寄付が 146 万円です。ほとんど二木のカネで建てられる。彼は、翌 56 年 3 月に 7000 万近い恐喝事件で捕まりますから、たぶん 150 万円はその一部で、はした金でしょう。しかし、他の 731 部隊員にとっては重要な意味を持つ 731 部隊の慰靈塔を、二木は私費で作ったという事になる。

お配りした資料の中に、1956 年 11 月の精魂会の呼びかけ文があります。その中に、この碑を作るには 151 万円かかりましたけれども、二木秀雄氏が 146 万円寄付して完済したと出ています。但し、呼びかけ人・世話人の中には二木秀雄の名前は無く、精魂会事務局は鈴木重夫が統括することになります。55 年 8 月に精魂塔を作つて第 1 回の会合を持ち、第 2 回の会合を 1956 年夏に開く半年前に、彼は戦後最大の恐喝事件で逮捕されて、新聞にも大きく載りました。さすがに二木の汚い金で 731 部隊の戦友会と慰靈塔を作つたということではまずいので、世話人会は一応会計報告をし、二木は「精魂会」と「精魂塔」の名前の命名人として名前を残すだけで、戦友会では彼は中心になれないようす

るのです。

精魂会の会員数は、56 年名簿に 187 人、66 年 234 人、73 年 243 人となります。圧倒的に軍医と技師と下士官で、1200 人の一般兵士はほとんど入っていません。慰靈塔には何も書いてありませんが、56 年よりかけ文では、隊員の中からも物故者・犠牲者が出てきたから、我々で仲間を慰靈する会を作ろうと言っています。慰靈の対象には、マルタ、中国人もロシア人もモンゴル人も入っていません。自分たちだけの慰靈塔だから、731 部隊の「ミニ靖国」なんです。

それに対して、少年兵たち、戦時中 14、5 歳で 731 部隊に入り、1958 年に 20 代末から 30 代初めですが、数十人で「戦友会」という少年兵だけの隊友会を作ります。最後の 90 年頃には物故者を含めて 300 人の名簿になります。但し、300 人のうちの 240 人ぐらいは精魂会と重なっていますから、実はせいぜい数十人です。この人たちの手記や証言を見ると、少年兵たちは、「多磨霊園のこの慰靈碑は、我々の行った満州でのすべての犠牲者にあてられるものである」「マルタの慰靈である」と解釈するのです。つまり、碑には何も書いていないが、幹部たちは「自分たちの仲間の慰靈」と割り切り、少年兵たちは「自分たちが殺した中国人やロシア人の魂も慰めるべきだ」と解釈している。多磨霊園の精魂塔は、そういう形で残されている。これは、二木秀雄

も想定しなかったことだろうと、私は読み解きました。

24. まだまだ残る、731部隊研究の課題

以上述べたことは、せいぜい 240 人ぐらいの幹部たちと、数十人の少年兵と、森村誠一『悪魔の餉食』が出てから告発を始めた人たち（医師はほんの数人しかいません）の記録にもとづくものです。隊員 3560 人という厚生省のいった数が正しいとすれば、「精魂会」や「戦友会」に集った元隊員は、けっこうよく全体の 1 割、300 人ぐらいだったのです。

だから残りの 3 千数百人は、ほとんど亡くなっていると思いますが、45 年 8 月に石井四郎が言った「絶対に 731 部隊にいたことは、妻に出すな。秘密は墓場まで持って行け」という命令を、生涯守り続けて亡くなったようです。しかし、3560 人の名簿を一人一人追いかけて行けば、特に有名でない人でも、ご遺族の所に「こんなものがあった」という資料や記録が出てくるかもしれません。

もうひとつは、1953 年に恩給法が出来て、55 年に精魂会・精魂塔ができる。他の部隊の戦友会が出来るのとほとんど同じ時期です。靖国に参拝する一般の戦友会の場合は、ようやく軍人恩給が出るようになった、俺たちは墓場で軍歌を歌ってなつかしむだけではなく、墓々と戦友会に入って國のために尽くした報酬をもらえるようになった、と思ったことでしょう。しかし 731 部隊は、それが出来なくて、多磨墓園にこっそり集まつたわけです。

ところが、1982 年にわかつたことは、どうやら厚生省はこっそりと（軍人恩給は本人が申請しないと出てこないのですが）少なくとも 200 人ぐらいの幹部たち、それから數十人の名簿で明らかになっている人たちには、どうも恩給を支給していたようだ。82 年国会で野党の質問に厚生省が答えたところによれば、石井四郎の場合は軍医の最高位である中将で月給 500 円でしたから、どうやら 2000 万円も恩給をもらったようだ。一般兵士は月給も 10 円以下でしたから、恩給もたいしたことではない。これは戦後の生活の中に、戦前の身分制度をそのまま残し差別したものだったのでないか。つまり、恩給が 3500 人のうちどのくらいの元隊員に、いつからどれだけ払われてきたのかを詳しく調べることによって、731 部隊の『悪魔の餉食』の爪痕が、戦後にどのように残されたのかが、わかってくると思います。このような意味で、731 部隊については、まだまだ研究することがあると思います。

【質疑応答】

（質問 1）1975 年に新宿ロイヤル病院が、歌舞伎町に作られたという話ですが、下高井戸の甲州街道沿いにロイヤル病院というのがありますが、関係ありますか。

加藤 院長が川西弘さんという人であれば、歌舞伎町の時のいわば彼の右腕で、731 ともイスラム教とも関係ないが、割と腕のいい金沢医科大学出身の先生で、その後総合病院という可能性があります。調査後に調べてくれた人がいて、今でも歌舞伎町にロイヤルクリニックがあり、その院長は川西さんなそうです。

この問題については、1979 年から 80 年、ちょうど森村誠一『悪魔の餉食』が本になる直前に、『週刊文春』『週刊新潮』などに、ロイヤルクリニックという怪しい病院が医師法違反で保険医を取り消されたという記事が載っています。

（質問 2）イスラム教に改宗して、どういう利権を得たのか。

加藤 二木秀雄が組織の「日本イスラム教団」の教えというのは、はっきりしています。第 1 に「アラーの命に神はなし」、第 2 に「ムハンマドは預言者である」、この 2 つのフレーズさえ覚えて唱えれば、誰でも信者になれる、という教えです。日本には、それまでも伝統ある「日本ムスリム協会」があり、代々木に本格的なモスク（教会）があるのですが、それはイスラム教のコーランの教義、イスラム法の難しい解釈を覚えなければ信徒になれない。二木秀雄が始めた日本イスラム教団は、「大乗イスラム」といって、この 2 つのフレーズを唱えれば、その教義の内容は日本国 2600 年の歴史の中で培ってきた大和魂とほとんど変わりはない、日本人はみな潜在的にムスリムである、というのが彼の解釈です。要するに、誰でもイスラム教徒になれるというのです。

実際に信徒になった人たちの告白文が、教団から本になっているのですが、あまり教義に対する感動とか宗教的悟りの話はなく、自分は先生の教えでこの二言を唱えて祈ったら、腹の痛みが治ったとか、リューマチがよくなったとか言うのです。要するに新興宗教の現世利益です。ポイントは、1975 年という教団設立時期で、オイルショックの真最中です。石油が入らず政府・財界も困っている時期に、サウジアラビアや中東産油国にコネをつける一番いい方法は、イスラム教徒になることだと、二木は計算したようです。

もうひとつ、裏があります。石油ショックの後は、日本で高度経済成長が終わって減収経営等で安定成長に移る時期です。ちょうどこの時期、東

京新宿の副都心開発が進むのです。歌舞伎町の逆側ですが、膨大な土地を、彼と平和相互銀行の小宮山英蔵頭取が一緒になって、オイルマネー（アラブの石油のお金）で買い占める計画がありました。そのために小宮山英蔵の弟、元郵政大臣の小宮山重四郎を信託にすることまでして、アラブの石油利権とオイルマネーに食い込もうとした。最終的には失敗するのですが、当時の自民党機関誌『月刊 自由民主』80年7月号に「照打つイスラーム新潮流」という論文を二木が書いて、「これからはイスラムの時代だ、パレスチナを承認して石油を確保せよ」と言っている調子のいい男です。

上智大学の眞面目な宗教史の研究者・小村明子さんは、「日本ではイスラム教がこういう形で初めて接付いた、非常に重要な出来事である」として博士論文を書き、それが立派な本になっていますが（『日本とイスラームが出会うとき』現代書館、2015年）、私の本では、そもそも二木秀敏に信仰心があったかどうかを問題にし、石油利権に食い込むための新興宗教の一つとして扱いました。

（質問3）おととし、平房に行きましたら全体の規模の大きさには、愕然としましたけれども、聖蹟陳列館が、ちょうど新築の工事中だったんです。それで出来上がったことを知った去年、1人の個人旅行で行って、非常にショックを受けました。アウシュビッツにも行けましたが、アウシュビッツの場合は、逃亡者も出ましたし、解放された後、解放された人もいたので、証言者がいるわけですね。でも731の場合は、生き証人が1人もいないわけですよね。

加藤 それは正確ではなくて、確かに「マルタ」は皆殺しにされたといいますが、その親族・友人や目撃者、それに細菌戦の被害者は中国にいっぱいいます。中国の文革が終わり改革開放の時期から中国人の被害者・証言者がいっぱい現れた。それで、こちらのNPOが熱心にとりくんだ国家賠償請求裁判が可能になったのです。

（質問4）でも、実際にメスを執ったお偉いさんは、アメリカと取引して、戦犯を免責されて、東大や慶大から博士号を取ったりして悠々と暮らしているわけですよ。それで下っ端者たちが良心の呵責に苦しめられながらも、つらい思いをしているわけです。でもドイツの場合は徹底的に追及していますよね。日本は何で追及しないのですか。

加藤 私は、日本とドイツは、基本的に同じだと思います。ドイツの場合最も重要な軍事研究をした人たちは、免責されてアメリカに連れて行かれます。いちばん有名なのはヴェルナー・フォン・ブラウン博士のケースで、ヒットラーの下

でV2ロケットを作っていた人が、アメリカに渡って、ミサイルを作り、宇宙ロケットを作って、今やアメリカで「宇宙旅行の父」といわれているわけです。これは、この20年ほどで明らかになってきたことで、ドイツで原爆を開発していた重要な物理学者を、アメリカの情報機関は戦時中から「アルソス作戦」で追いかけ、ソ連の手に渡らないようにしました。戦後はもっと大規模に、「ペーパークリップ作戦」と言いまして、すぐれた科学者たちを免責し、アメリカに「亡命」させました。当時のドイツはノーベル賞をいっぱい出して、最高の科学技術大国でした。アメリカにとって有益なドイツの研究者を侵犯にしないでアメリカに連れて行くという作戦が、これは、CIAが指揮して行われました。似たようなことを、ソ連もやっていました。

日本の731部隊免責も、このドイツに準じた事例だと思います。日本の原爆作りの物理学者たちの研究はあまりにも初步的だったので、731部隊ほどの問題にならなかった。それでも米軍は、ちゃんと調査報告書を作っていました。日本の原爆研究は、応用面では遅れているけれども、基礎研究の面では役に立つ。特に中間子を発表した湯川秀樹は世界的水準だから、日本からアメリカに招く留学の第1号にする、などと提言しています。それで湯川をプリンストン大学に招き、研究させるわけです。

（質問5）731の収集したデータを、さらにアメリカの方では研究を絶けて、朝鮮戦争やベトナム戦争でも使われたと言われていますよね。私の苦いたいことは、戦争というものは人間を悪魔に変えてしまうものだという事です。そういうことが山ほどありますよね。それを安倍首相は知っているのでしょうか。知っていて「戦争のできる国」にしようとしているのでしょうかねえ。

加藤 私の友人が成蹊大学で彼の政治学の先生で、彼の言によれば「目立たない学生だった」が「無知で無恥だ」と言っています。安倍は戦争を表面的に知っているでしょうが、深く勉強し、研究することはなかった。だから單学共闘にも熱心です。安倍内閣のもとで、日本の科学研究全体が「いつかきた道」に進もうとしているという危機感が、私がこの731部隊研究を始めた動機のひとつです。

（質問6）今前の方が、ドイツの軍医でナチスで生体実験をした者と731を比較して質問されたと思うのです。ニュルンベルク裁判の中では、生体実験をした26名の医師を告発してそのうち7名の者が処刑された、こういう徹底した追及をドイツはしたのですね。それで今先生がおっしゃられた「構

造は日本と変わらない」というのは、ちょっと間違いだと思いますね。

鶴藤 私は、そこを確かめようと思って、今年の2月はドイツの連邦公文書館に行ってきました。私のもともとの専門はドイツです。ドイツの生物戦・細菌戦の関係で捕まった人たちのほとんどは、アウシュビッツその他の収容所の中でユダヤ人に対して行った人体実験の問題です。もちろん、その後「ニュルンベルグ・コード」が作られ、ドイツ医学界の全体が反省しているという意味ではおっしゃった通りです。けれどもこれは、ヒトラーの対連合軍軍事戦略、科学技術予算配分と関係しています。

ヒットラーは軍事技術としての細菌戦とか原爆はあまり評価していなかった。彼が重視していたのは潜水艦とロケット、それに毒ガスでした。そのためナチスの下での生物戦・細菌戦研究は、それほど予算が配分されず、進んでいなかった。確かにメンゲレの双子実験、空軍の低温実験等生体実験は行われ、「人道に対する罪」で裁かれますが、アメリカ側の評価はそれほど高くない。1947年にソ連から石井四郎等の尋問要求があって、アメリカのワシントンで検討された時、「もしも日本の研究がナチスの生物戦研究より進んでいて、ソ連に対して秘密できるならば、彼らを懲罰には関わらないでデータを取って来い」というのが、フェル、ヒル調査団へのアメリカ軍の命令だった。事実その通りになった。つまり生物戦・細菌戦研究という面では、日本の方がドイツより進んでいた。新著の方では、エド・レジス『悪魔の生物学——日米英・秘密生物兵器計画の眞実』の、米軍生物戦関係者にとって「連合軍の諜報機関による報告とは裏腹に、ドイツの生物戦プロジェクトはささやかなもので、実際の兵器は一つも製造していなかった。……それとは対照的に、日本は第二次世界大戦が始まるずっと前から、大規模な細菌戦プログラムに乗りだしていた」という一節を、引用しておきました（河出書房新社、2001年）。

つまり、生物兵器に限っては、731部隊の人体実験データは、ナチス・ドイツよりも貴重であるというのが、アメリカのキャンプ・デトリックの評価だったようです。それで調べていくと、最後CIAのヨーロッパでの記録の中に、ドイツ人科学者の米國「亡命」によるいろいろな免責事例が「ペーパークリップ作戦」として出て来る。日本語でもアニー・ジェイコブセン『ナチ科学者を獲得せよ！ アメリカ極秘国家プロジェクト ペーパークリップ作戦』が出ています（太田出版、2015年）。

ただし、その後の科学者と政府が、そのことについてちゃんと反省をしているかどうかという点では、雲泥の差があります。ドイツの場合は、ナ

チスへの追求が徹底しましたから、旧ナチ科学者はアメリカや南米に亡命して、その後ドイツには戻れない。日本では、GHQのウイロビーの底譲りとサムスの医学者登用・医師活用により、731部隊の関係者を免責し復権させた。亡命ドイツ人よりはるかに飽食した生活を送った、ということです。

もうひとつ言いますと、いま日本学術会議で3回目の軍事研究反対が決議されていますね。1950年に一度、日本学術会議は「戦争を目的とする科学研究には絶対從わない」という決議をあげています。ところがその後に朝鮮戦争が起こりますと、朝鮮戦争で細菌兵器が使われたのではないかと、学術会議の、平野義太郎とか福島要一とか、いわゆる民主主義科学者協会（民科）の会員たちが、「細菌戦に協力しない」という決議案を出します。これに反対したのが、当時の学術会議第7部です。第7部は医学・薬学です。7部の幹部だったのが、戸田正三（京大教授で731部隊嘱託・当時金沢大学学長）と木村謙（京大教授で石井の恩師の一人、731部隊嘱託）でした。彼らが「細菌戦が実際に朝鮮半島で行われたという証拠は見つかっていない」という理由で反対する。もう1人、有名な法学者の我妻栄が「細菌戦はジュネーブ議定書で戦時使用が禁止されている。わが国は憲法第9条があって、そもそも戦争しない事になっているから、そういう決議は必要ない」という理由で反対し、細菌戦反対決議は採択されませんでした。

今日ここに持ってきてているのが、医学連の『ハバロフスク裁判公判記録』、1973年に東京大学医学部学生自治会名で発行されたハバロフスク裁判公判審議の復刻版です。1973年に防衛医大が出来て、日本の医者たちは再び戦争に動員されようとしていると警告し、それに反対するために、当時の医学連の若い医学生たちは、日本の医学がどのような歩みをとどめたかを学ぼうと、731部隊の細菌戦を振り返るのです。当時医学部学生運動のなかで隠された、心ある医師たちの記録で、もう一つの日本医学の伝統です。

（質問7）先ほど先生が石井四郎が731部隊を解散しないで、その後も給料等を支払うと仰ったんですが、その財源はどこから来たんでしょうか。

鶴藤 泰村謙一さんは、『「悪魔の飽食」ノート』の中で、なお残された731部隊の隸の5つ目に、731部隊は一体どこに金を残したのだろう、と呟っています。当時東大以上の潤沢な研究予算をとっていたのが731部隊です。マルタには良いものを食べさせ健康体にしないといい実験材料にはならないというので、捕虜にもちゃんと食事を与えます。セントラルヒーティング、水洗便所、雑菌が育たない衛生環境で細菌研究をやっていたのです。施

設、設備、予算が膨大で、森村誠一は、敗戦時 2000 万円、現在の 20 億円以上ではないかと言っています。その他に医療機器なども贅沢で、白金製シャーレや鶴のインゴットなど貴金属もあった。船で運んだいわゆる隠匿物資、これが相当あったはずです。したがって、おそらく一年間くらいは 1300 人に給料を払える資金があったと思われます。

ただし連絡網がうまく機能した所と、機能しない所がありまして、例えば山口県は、千葉の「留守業務部」の責任者だった太田大佐が、その後萩市で病院を開業しますが、どうも 1950 年ぐらいまできちんと記されているようです。岩手県とか宮城県では 1 年ぐらいで無くなっています。だから、300 円ぐらいもらって、これを退職金、口止め料だと思った人がいる。それに對して、長野県では何回か来たから給料という人もいる。恐らく全然もらわなかつた人もいっぱいいる、という風にバラバラです。しかしそれらの財源は、隠匿物資、隠匿資金で、おそらく 2 年間ぐらいは続いたと思います。その後、占領軍からの機密費の金が、1947 年にはデータを提供する見返りで 25 万円、今のお金にして 2500 万円ほどあります。二木秀雄は金儲けのうまい男で、こちらの方は、出版事業・廣告取り等ビジネスで金を作っていく。

日本ブランドパンクを作った時の、最大の株主は神戸銀行、2 番目は三和銀行です。ところが二木の政界ジープ恐喝事件の裁判記録を見ると、恐喝して金を奪い取った相手に神戸銀行が入っている。つまり、金蔓だったようです。そこでミドリ十字の内藤良一たちは、二木と縁を切つただろと思われます。

M 資金というのを聞いたことがあるでしょう。戦後 GHQ が財産没収や隠匿物資摘発で作っていた金がどこかにブールされたのではないかと言う幻の闇金融で、それに引っかかる企業や個人がいる怪しげなお金です。それと同じように、731 部隊の資金、隠匿物資の行方はわかっていないません。ジャーナリストの方がいれば、是非やって頂きたいと思います。

(質問 8) ソ連もブラウンが逃げた後、ペーネミュンデの研究者を運行しましたよね。それとの比較で言うと、この 731 というのは対ソ連が目的であったにもかかわらず、アメリカが関心を持ってその人たちを再雇用しようとしたのに対し、ソ連はなぜ、ドイツに対してペーネミュンデでやった同じような事を、731 に対してやらなかったのか。ソ連にはその当時細菌喰作戦が無かったのか、有ったのか、そこをまずお聞きしたい。これが 1 つ。

次は、日本の細菌研究、生体実験等々が、ドイツのそれに比べて、予算等々、ヒットラーが重

視していなかつたからという風に答えられたけれども、本当にそうだったのか、それほどドイツの BC 作戦はヤワだったのか。これもやっぱりきちんと見ないといけないじゃないかというのが 2 番目。

3 番目は、九大の生体実験がありましたが、あの時には、これはアメリカ人が対象になったわけですね。ところが 731 の場合には、白人の中ではロシア人が入っていたけれども別に欧米人はいなかつた。もし、その時に 731 部隊のマルタの中にアメリカ人やイギリス人がいたならば、果してこの免責はあり得たかどうか、これをお聞きしたい。

加藤 1 番目の問題、ソ連の問題ですけれども、ソ連でこの問題を追及しているのは、歴史学者ロイ・メドベージエフの双子の兄の生物学者ジョセフ・メドベージエフです。彼らの『知られざるスターイン』などを見ると、ソ連も確かに細菌研究を始めています。但し 731 部隊のような水塙では行われていなかつたので、むしろ 731 部隊関係者を捕まえて協力させ、ソ連側もデータを探ろうとしていた。アメリカ側は、そのように見ていました。

ドイツの V2 ロケットを作っていたペーネミュンデ陸軍兵器試験場は、ソ連が到着した時には徹底的に破壊され、ブラウン博士は米軍に投降し、126 人の高級科学者・技術者と共に米国のフォートブリスに「亡命」しました。ペーパークリップ作戦の有名な事例です。ただし兵器生産工場の技術者たちは、ソ連軍の捕虜になり、たぶんソ連のロケット開発に使われたと考えられます。

原爆開発については、ドイツのノーベル賞受賞者ハイゼンベルグ等を迫った英米のアルソス作戦がよく知られていますが、ソ連も、米英マンハッタン計画の中に物理学者クラウス・フックスのような諜報員まで送り込み、原子炉設計図まで手に入れます。それをもとに、ドイツ人の戦争捕虜である数百人の科学者・技術者を隔離し秘密都市に集めて開発させ、1949 年には核実験を可能にしたのです。これは、拙著『日本の社会主义——原爆反対・原発推進の論理』(岩波書店、2013 年)にも書きました。

このように、ナチス・ドイツの軍事技術と米ソの科学技術者獲得作戦は、兵器の種類、研究領域、ドイツ側の開発水準によって、それぞれ異なります。

これが 2 番目のご質問、ドイツの ABC 兵器の問題につながります。今度の本では、ペーパークリップ作戦の生物化学兵器開発、ドイツ人科学者獲得との関連で書いてあります。ドイツは、先ほども書いましたが、潜水艦とロケットが進んでいました、毒ガスも進んでいました。それから原爆も、

日本よりはるかに進んでいました。ただ生物兵器については、アメリカの判定では、日本の 731 部隊の方が進んでいた、だからデータを独占せよとなるのです。

その關係で、ニュルンベルグ医師裁判も調べてみました。アニー・ジェイコブセンによると、ナチス・ドイツの全国保健指導者代理でペスト菌を中心的に研究していたクルト・ブローメが、いつたんペーパークリップ作戦でアメリカ側に「保護」され米軍に協力していましたが、第三帝國軍医監督でワクチン開発の最高責任者だったヴァルター・P・シュライバー少将がソ連の捕虜となつた。1946 年 8 月 26 日、ニュルンベルグ裁判にソ連側検察の証人としてシュライバーが出廷し、ドイツの細菌戰準備・人体実験の実質は、ブローメのペスト菌研究だったと証言し、懲犯として告発します。そのためブローメは逮捕されて、ニュルンベルグ医師裁判の被告となり、シュライバーはソ連の刑務所に戻されます（このあたり、極東國際軍事裁判でソ連側証人にされた川島龍三と似ています）。

石井四郎はソ連にとって、いわば「日本のシュライバー」で、実行部隊の川島清が「731 のブローメ」に相当するのですが、ソ連が戦争捕虜として確保したのは石井ではなく、ドイツのシュライバーと 731 の川島であったことが、47 年のソ連側による石井四郎、菊池清、太田達の身柄引き渡し・尋問要求の背景にあったと考えられます。ただしブローメは、医師裁判で起訴されましたが無罪となり、西ドイツの米軍基地内で米軍の生物戦研究に携わります。またシュライバーは、48 年にソ連から東独に帰還し、やがて西独に移り、アメリカ、アルゼンチンと数奇な運命を辿ります。このように、日本の石井四郎ら 731 部隊医師から詳しいデータをとれば、ソ連がシュライバーや川島清から得た可能性のある情報を以上のものを、アメリカは独占できる状況にあったのです。

ではなぜ、こういうニュルンベルグ裁判ではオモテに出た問題が、極東國際軍事裁判では取り上げられないのか。1947 年頃の対日審議会の議事録がアメリカ国立公文書館にあるのですが、ソ連側は、確かにアメリカが本来戦犯になるべき人たちを匿しているのではないかと、731 ではなく一般的問題として出してきます。それに對してアメリカが反論するのが、抑留船運送の遅れ、つまりソ連側は船を出して捕虜は 46 年中に全部帰すと言っていたけれども、まだ一割も帰ってきていないじゃないか。こう言う話をしています。これがハバロフスク裁判まで続くのです。

1949 年ハバロフスク裁判で、ソ連側は、731 部隊石井四郎と共に、改めて昭和天皇を懲犯として

裁こうとする。それに対するアメリカ側の回答は、ソ連が戦争捕虜遣は完了し残っているのは懲犯だけだといつてるのは誤りだ、ソ連には 36 万人の日本人がまだ残っているはずだと反論します。それでソ連の裁判はいい加減で信用できない、日本の懲犯裁判は極東國際軍事裁判で結審している、と言つて公式に拒否する。極東國際軍事裁判、つまり東京裁判には、ドイツのニュルンベルグ裁判を引き継いだものとともに、ニュルンベルグ裁判を通して現れた米ソの駆け引きが、より強く影を落としたと思われます。

最後のご質問の、九大事件のように被害者が歐米人だったら免罪はありえたかという問題も、これに関連します。1946 年のはじめに、G II ウィロビーが隠していた石井四郎の身柄を明かし、CIC ソープ准将らの尋問を許さざるを得なくなるのは、日本共産党提供の UP 通信スクープとして、石井四郎らが満州の奉天で中国人ばかりでなくアメリカ人捕虜も人体実験の材料にしていたという米軍英字新聞のニュースが読めたからでした。英文紙ですから、ワシントンから聞合せがあり、マッカーサー命令で石井四郎の身柄引き渡しが日本政府に公式に指示されたのです。フィリピンから移送された米軍人捕虜のことでしたが、石井四郎らは強く否定し、「マルタ」は満州の警察・憲兵隊の捕まえた抗日分子だけだと言うことにします。

これは、まだまだ調べる余地があるのですけれども、たぶん「マルタ」や細菌戰被害者に米国人、英國人、オランダ人などが入っている豪華・豪奢があれば、米軍の追及も違ったかたちになっていたでしょう。ただし連合国でもソ連政府は、ハバロフスク裁判で、731 部隊犠牲者の人種・民族を問題にすることはありませんでした。ハルビンのロシア人なら革命を逃れた白系ロシア人だろうと考えたのかもしれません。

731 部隊関係の医師や兵士の回想等を見ていると、確かに「恐らくマルタの中に自人がいたら、連合軍は許さなかっただろう」というのはあります。あと、私はこれが日本医学界の本質的問題だと思うのですが、「我々は科学のために、日本の医学の発達のために満州で細菌研究をした。我々が人体実験で使った相手は、中国人、モンゴル人、ロシア人等の中の、警察・憲兵隊に逮捕された抗日分子で、彼らはいずれ死刑になるはずの人々だった。そこで彼らを、最後に人類全体の為に役立てるよう解剖したんだ」という弁明がでてきます。これが 731 医学の偽らざる実態だらうと思います。こういう倫理なき科学主義が、現在の安倍内閣まで続く、科学技術の軍事利用の問題と關係していると、私は考えています。以上です。（完）